

スリランカにおける貝葉文書・典籍 (Palm Leaf Manuscripts) の作成方法について

三 保 忠 夫*

Tadao MIHO

On the Process of the Making the Palm Leaf Manuscripts in Sri Lanka
[Key Words : Baiyō, Baitarayō, Palm-leaf-manuscripts, Stylus, Sri Lanka.]

Abstract : The present description is an on-the-spot investigation into the process of the making the Palm Leaf Manuscripts in Sri Lanka.

[目次]

はじめに

- 1 タリポットヤシ・パルミラヤシ
ーペラデニア植物園ー
- 2 アル・ヴィハーラ寺における試作実演
- 3 キャンディーの骨董品店における見聞
- 4 1930年代における作成記録
- 5 所蔵機関について

おわりに

文字や絵画は人類の知的営みの所産である。その史的展開には、なかなか興味深いものがあるが、これをまた、その依拠する用材、即ち、書記素材の変遷と併せみていくとき、その興味はいよいよ深まっていくようである。書記の料材ーペンやインク、料紙の歴史、また書記の方法の歴史などには、地域性や風土と密接に関わる人々の生活や習俗、信仰等が色濃く反映しているからである。

東南アジア・南西アジアなどを中心とする地域に、ヤシの葉 Palm leafをもって文書・典籍の作成が行われたことは夙に知られている。筆者もそうした書記素材に関心を持ち、若干の調査を行ってきた¹⁾。しかし、今日、紙Paperの時代、ペンの時代ともなって、既に、久しい。現在する文書、典籍の目録作成やマイクロフィルム化の作業も行われつつあるが、その進捗状況は、必ずしも満足されるものでなく、いわんや、その作成方法や素材・料材の実態等については、不明瞭のままに歴史の彼方に消え去ろうとしている。

たとえ一時期にせよ、一地域にせよ、そこにそれなり

の言語生活、書記生活が行われていたとすれば、その実態を克明に、また、できるだけ正確に記録し、記述していくのも我々の任務の一であろう。それが消え去る前に、多少なりともこれを記録・吟味し、かつは後世に託していくべきである。

こうした意図により、筆者は、過般、短期ながらスリランカに調査を行った（'94年3月28日～4月4日）。決して十分なものではないが、本稿では、このスリランカにおける貝葉文書・典籍の作成方法とその素材について述べたい。他の地域におけるそれとの比較を行えば、その特徴もいっそう明瞭となるであろうが、その前段階として、スリランカにおける場合に限定し、その作成方法と素材につき、管見したところを記しておきたい。

なお、現地においては、西部州ガンパハ（Gampaha）出身のR.K.Yapa氏²⁾の、また、帰国後は、本学理学院大学院留学生特別コースに在学中の、Sarath Hapugoda氏³⁾（中央州キャンディ市在住）の御指導・御助言をいただいた。記して謝意を表したい。

はじめに

スリランカは、かつてセイロン（Ceylon）という名で知られたインドの南方、インド洋上の島である。面積は、66,000km²、人口17,410,000人、主要言語は、シンハラ語（公用語、国語として60%）、タミル語（国語として25%）、英語である⁴⁾。首都はスリジャヤワルダナプラコッテ（Sri Jayawardanapurakotte）であるが、都市としては、旧首都のコロンボ（Colombo）、およびキャ

* 島根大学教育学部 国語科教育研究室（日本語学）

ンディ (Kandy) やジャフナ (Jaffna) の方がよく知られている。

スリランカは、名にしおう仏教国で、古来、上座部仏教 (南方仏教) の聖地としても知られている。インドのマウリヤ朝時代 (B.C.317年成立, 同180年頃滅) にその伝来があったとされる。今の共和国憲法 (1972年5月22日制定) では、仏教の保護・育成は国家の責務とされているが、1981年の国勢調査によれば、民族構成は、シンハラ人約74%、タミル人18%、ムスリム7.4%で、この宗教別人口比は、仏教徒69.3% (シンハラ人の9割)、ヒンドゥー教徒15.5% (タミル人の9割)、イスラム教徒7.6%、キリスト教徒7.5%となっている。

16世紀初頭からポルトガル、オランダ等の侵略が始まり、1796年、イギリスの植民地支配下に入った。1948年、英連邦内の自治領セイロンとして独立し、1955年12月、国連加盟、1972年、完全独立してスリランカ共和国と改称し、さらに、1978年、国名をスリランカ民主社会主義共和国 (Democratic Socialist Republic of Sri Lanka) と改めた。

さて、こうしたスリランカにおいて用いられた書記素材としては、まず、ヤシの葉 (貝葉) と尖筆とをあげなければならない。パルミラヤシやタリポットヤシの葉を書記用に調製⁹⁾、これを文書類の、または、典籍類の料紙とするのである。ヤシの葉を調製し、書記——正確には、刻字——が可能な状態になったものをオーラolaという。文書類とは、公私の通信文、メモ、護符 (お守り) など、主に当座に作成されるような、多くは日常的な公私の文書である。典籍類とは、宗教、文学、占星術 (天文)、医薬等に関わる書物であり、多くは、寺院や国家の図書室や家代々に保管され、時代を超えて利用されていく。

文書類には、どちらかといえば、パルミラヤシ *Borassus flabellifer* の葉が用いられたようであり、この葉を tal kola という。tal とは、パルミラヤシの木 tal gasa [ア] ¹⁰⁾ のそれであり、その葉を tal kola ya [イ] ¹¹⁾ という。kola ya 自体は、ふつうの一般名詞で、一枚の葉 leaf (単数)、kola は複数の葉 (複数) を意味し、さらには、形容詞として、緑色の green、また転じて、紙を意味することもある⁹⁾。

典籍類には、多くタリポットヤシ、別名コリファヤシ *Corypha umbraculifera* が用いられる。パルミラヤシより、葉は大きく丈夫であり、ために、この方が大型本の作成に有利であり、長期の保存にもよく耐えるからである。[追記1]

典籍・書物の形態となった貝葉本は、シンハラ語でプ

スコラ・ポタ *Puskola pota* [ウ] ¹²⁾ という。編集や整本の手を経た、紙数 (葉数) を有する草子本を意味する。

pota は、一冊の本 book (口語体、単数、中性) のことで、この複数形は pot, また、pat である。複合語に pot rakkaya (書棚、本棚)、pirit pot (paritta の儀礼の際の聖典の記された木葉版) などがある⁹⁾。

シンハラ語においては、口語体と文章体との懸隔が大きく、これらの口語形に対しては *pustakaya* [エ] ¹³⁾ (書物、本、book) との文語形もあり、この間には *granthaya* [オ] ¹⁴⁾ との形も存在する。(—ya が接尾すれば単数形、省けば複数形となる)。文語形は、*pustakālaya* (図書館、書庫、教典堂、library)、*pustaka lēkhanaya* (文献目録、書誌学) のような、あらたまった場合に用いられる。

オーラ葉に文字を記すには、筆様の筆具で文字を書くか⁹⁾、あるいは、尖筆で刻字するか、のいずれかであるが、スリランカではその後者が行われた。

スリランカでは、その筆刻具を *panhiñda* [カ] ¹⁵⁾ (尖筆) という⁹⁾。

1 タリポットヤシ・パルミラヤシ —ペラデニア植物園—

まず、書記素材としてのヤシの二種について述べよう。

スリランカの古都の一、キャンディからコロomboの方 (西南) へ6 km ほど行ったところに、ペラデニア (Peradeniya) の町があり、ここには、マハヴェリ河 (Mahaweli Ganga) に沿って総面積5.6km² という広大な植物園 Peradeniya Botanical Gardens がある。かつては、宮殿の一であったとされ、広い園内には4,000種以上もの植物が集められ、国内外からの多くの見学者を迎えている。

(1) タリポットヤシ

筋道からして、筆者の最初に実見できたのは、タリポットヤシ *Talipot palm*¹⁶⁾ の方であった。地上1 m 高の部分の胴周りは、3.5 m (ささくれた葉柄の残骸部を含む) もあったが、やがては樹高60~80フィート (18~25 m) に達するといひ、“巨大な”とでも形容する他ないその偉容さには、思わず、感歎の声をあげざるを得なかった。その幹には、巨大な葉柄 (半円筒形、基部膨大) の重々しくささくれ立った残骸が、地際から上部まで、幹にびっしりと、まるで鎧を着込んだかのように重なり合って付着しており、樹冠部には、いかにも強靱そうな葉柄の先に、その割にはやや小ぶりかともみえる掌状扇形葉がバ

サバサと、しかし、規則正しく（真下から見上げると幹から放射状に突き出た葉柄は、12か13かの列をなし、重なり合い、規則正しく、かつ、少しずつ左へ旋回しながら生い繁っている）、深緑色を呈して繁り合っているのであった。（頂生叢出）。

このタリポットヤシの前には、眼の高さほどに大きな説明板が立てられおり、シンハラ語、タミル語、英語の三ヶ国語、三段書による次のような解説がなされている。（黒地に白文字、英文だけを引く、／は原本改行）。

TALIPOT PALM (E)

CORYPHA UMBRACULIFERA

(PALMAE) SRILANKA, S. INDIA.

(以上は標題)

THIS IS ABOUT THE LARGEST OF ALL PALMS/WHEN FULLY GROWN. IT GROWS TO A HEIGHT OF 60~80/FEET WITH A STRAIGHT CYLINDRICAL TRUNK 3~4 FEET/IN DIAMETER WITH A CROWN OF IMMENSE FANLIKE/LEAVES USED FOR OLAS UMBRELLAS, SUNSHADES & ^(C) /AT THE AGE OF 30~40 YEARS IT PRODUCES

AN ENO-/RMOUS PYRAMIDAL CREAMY WHITE INFLORESCENCE/15 TO 25 FEET IN HEIGHT UPON THE SUMMIT OF THE/STEM & WHEN THE FRUIT IS RIPE THE PLANT DIES./

上記によれば——、タリポットヤシ Talipot palm (英名) は、ヤシ科 Palmae の、学名 *Corypha umbraculifera* コリファヤシであり、スリランカと南インドに生育する。ヤシ類の内では最大のものであり、その成長時には、60~80フィートに達する。まっすぐな円柱状の、直径3~4フィートの幹を有し、樹冠部には、オラス（葉）かさや日よけ（日がさ）などに利用される¹¹⁾、非常に大きな扇状の葉が繁る。30~40年たつと、木の頂上部に、15~25フィートの花柄をもつ巨大なピラミッド状の、クリームがかった、白い花（肉穂状）が咲き、その果実が熟すると同時に、このヤシは枯死する、一とある。

その開花期については、かつては、100年に1回（即ち、その寿命は100年）であるといわれていたが、これは、昔の人は寿命も短く、一生に一度、その開花をみるようなできごととは、あたかも100年サイクルのできごとのようにみえたところからの俗伝であった（R.K. Yapa氏談）。

また、果実は、最初に実ってから最後の実が落ちるま

で5ヶ年を要するといひ、全部の実が落ちたところで幹も葉も枯れてしまうという。日本の竹に似ている。

スリランカでは、昔の人は、ことわざではないが、悪い子供とこの木の花はいっしょ、と言っていたとのことである。悪い子（赤ン坊）が生れたらお母さんが死ぬ、この木に花が咲いたらこの木（母）は枯れるからだと言明される（同Yapa氏談）。

タリポットヤシの葉は巨大で長い。書記用には、その若葉が供されるというが、1m前後の料紙を切り出すことも可能であろう。葉には、節葉（掌の指それぞれに相当する部分）の中央部に主脈が通っており、さらに、この左右両野の中央部にも副脈（準主脈）とでも称し得る太目の筋が走っている（主副の脈によって4分野を数え得、さらに、数ミリ間隔に平行する細い脈が認められる）。若木の葉は、濃緑色で軟く、紙を破るようになぎり取ることもできるが、大木となった幹の葉は、硬くて手でちぎり取ることはできない。

(2) パルミラヤシ

次に、パルミラヤシであるが、これは、ヤシ科のオウギヤシ属 *Borassus* に属し、英名 *Palmyra palm*、学名 *Borassus Flabellifer*.L. といい、樹高20m前後の樹冠部に掌状扇形葉を叢出する¹²⁾。

スリランカでは、talタルといい、パルマイラともいう。タミルではpanneiパンネイという。

実見したのは、幹の胴周り2.10mほどのものであったが、これは中程度の大きさであり、場所によってはもっと大きくなるとのことであった。幹の肌はきれいで（とはいっても、巨大な象の足みたいな肌ではあるが）、背は、すっきり伸びて高い。葉は、樹冠部にこじんまりとまとまって繁る。葉柄の残骸を、一部に留めるものもあったが（地上1.5m辺）、葉の青い部分に無理に引きちぎるとこうなるのであり、手も届かぬ高所などでは、下葉の枯れるに従い、ひとりできれいに落ちていくという。

このヤシの特徴は、外観上、その樹冠部が、ちょうどタンポポの花後のワタ毛のような球状をなすところにある。タリポットヤシが、重装備の鎧武者であるとすれば、こちらの方は、スマートな槍騎兵といった感じであろうか。

スリランカでは、このヤシはどこにでもあるが、多くてよく育つのは、タミル人の住む北部の、ジャフナ Jaffna、ペニンシュラ半島 Peninsula、デルフト島 Delft Is. などであり、その林は、これら地域の景観を特徴付けてもいとされる。その代り、ココヤシが、これらにはみられないという。これは、南西部などではどこでもふつうにみられる羽状葉のヤシである。

こうした地域は、雨も少なく、激しく乾燥して砂漠のような気候条件、地質条件の下にある。ジャフナ半島には川もない。地下数メートルの石灰岩層からかろうじて地下水が得られ、これによって灌漑農業も行われているが、耕作地には限りがあり、こうした耕作に適さない地域に、パルミラヤシなどが植えられ、生活諸般を支える源となっている。タミル族は、このヤシの利用法801種を数えたとた歌を知っているという。

本来はアフリカ原産のヤシのようだが、インド南部の気候・風土の似た地域にも多く植栽されている。

なお、ペラデニア植物園には、パルミラヤシに同種のヤシもあるが（ブームラ島、ベンガル、その他の産）、幹や葉の形態や強度、利用方法などに相違があるようである。

2 アル・ヴィハーラ寺における試作実演

スリランカの中央州のマータレー県マータレー（Matale）に、アル・ヴィハーラ寺（Aloka Viharaya）という石窟寺院がある。紀元前88年、それまで口承されてきた仏陀の教えが、ここで初めて文字に記されたと伝えられる寺であり、これに因み、今日、ここでは貝葉（本）の試作実演をみることができ。ヤシの葉に、どのようにして文字を書く（刻む）か、という程度の実演であるが、担当されたW.Edwin氏により、この他にも幾分かの見聞を得ることができた（'94、3、31調）。

まず、貝葉の試作であるが、これは次のようにして行われる。

- ①素材として調製されたパルミラヤシの葉、木炭粉、ヤシ油、鉄筆、ハサミを用意する。
- ②長めのヤシの葉を横に置き、これに鉄製の尖筆で左端から右方へ細かな文字を刻み込んでいく（シンハラ字・シンハラ語、横書き）。
- ③その後、布切れを指3、4本分ほどの太さに丸く括り、その頭部に墨を着け、刻面に擦り込む。墨は、木炭粉にヤシ油をたらした程度のもので、余分な液は軟かい布切れで拭き取る。
- ④ヤシの葉の、文字を記した部分をハサミで（縦に）切り取る。

これは、書記方法としては、多分に日常的なものでなかったかともみうけられる。③の後で米粉を用いて磨く段階があるとも聞いていたが、この作業はみられなかった。あるいは、①の段階では、既に、一定の規格で裁断され、裁断部（上下左右の小口相当部）には防腐・防虫のため

に、焦がしを付けたり塗料を塗ったりしたものが用意されるケースもあったようだが、これは、大部の貴重書の作成などに行われた方法らしい。

以上に関連して見聞したところを記す。

(1) 書記に用いる調製済みのヤシの葉をola (Leaves) といひ（インドではollah）、これにはPalmyrah palm を用いる。また、Talipot palmをも用いる。スリランカではこの二種だけである。英名にもとづき、スリランカでは、これらをバルマイラ、タリポトとも称している。

これらのヤシの葉は、葉柄や節葉の主脈、また、葉の先端部を切り離し、後、ボイルするなどの調製を経てはじめて筆刻に供することができる。調製とは、大体、①ヤシの葉を1回ゆでる、これには3時間ほどを要する、ついで、②乾燥させる、これは3ケ日くらいを要する、次に、③磨く（なめす）、——の工程をいう。

こうして作成された貝葉は、500年、あるいは、長くても2～3,000年くらいの寿命をもつものもあるという。

Edwin氏の作業場には、パルミラヤシの葉の、掌状一葉が、そのまま乾燥させて壁に立てかけられていた。葉柄の基部と葉の先端は切除されていたが、それでも、扇状の要のところから葉の先までは180cmあまりもあった。しかし、この一葉は、サンプルとして展示されていたに過ぎない。

同作業場には、また、幾枚ものパルミラヤシの葉（長さ2m弱～1mくらい、巾3cm～9cm前後）を次々と丸く巻き込んで、直径30cm（弱）くらいのバームクーヘン型の束にしたものが、五段重ねで計32束ほど、積み上げられていた。他所（生産地）から持って来たままの状態らしいが、これらは、ボイル直後の、まだ軟かい時分に、丸く巻き、収束していったものらしい。収束後はそれぞれ、同じヤシの葉を細く割いた状態のヒモで、ほぼ十文字形に括られる。

ボイル後のヤシの葉の葉面には小さなデコボコがある。これから先、ヤシの葉は、同寺の僧侶の手により、次のような処置が施される。

(i) 水にひたす。水のしたたるほどに湿らせて天日にさらすという行為を繰り返す。即ち、屋外の軒下で、上記の束を1束ずつ持ち出し、水にひたす。水から上げ、次に、その輪状の中央部から一枚ずつ、シャラーッと勢いよく、次々と葉を抜き出す。抜き出した葉の一端を一本の棒に突き通し、神祭の御幣のような形を作っていく。20枚前後くらいであろうか、それらを貫いた状態のものを石段や石畳の上に広げ、天日にさらす。こうして、30分余の内に、3、4本分が天日にさらされていた。

葉は、カサカサと長く伸び、くしゃくしゃによじれたような状態となるが、いっぺんに長時間さらすのではなく、水分が乾いたら中に入れ、水をかけては乾かす、ということは何度も繰り返すのだという。これは、「発酵させる、(いな)、発酵ではないが、発酵させるみたいな形にする」(Yapa氏)、工程であるとのことである。タイにバイランを調査された小林良生氏¹⁰⁾によれば、これは「葉を成熟させるためのプロセス」であると説明される。

葉を貫き通す棒は、長さ1m~1.1mくらい、太さ1cm弱のものだが、これは、実は、同じくヤシの葉の、主脈部(掌状葉の中央部に放射状に走っている。V字型をなす各節葉の底部に位置する芯)を利用したものである。日本の孟宗竹を割り裂いた竹串のような感じで、これもその生産地から届けられたものらしい。

輪状の束から抜き出されるヤシの葉は、その一端に、既に1cmくらいの穴があげられており、ここに棒を通すのである。穴は、V字型をなしており、そのボイル前に、ナイフ様の道具によってあげられたものである。

葉の広げられる石畳は、熱帯の太陽を浴びて熱く焼けている。スリランカの寺域は、すべて聖地であり、入るには素足とならねばならないが、慣れない者は、素足で歩くこともできないほどの石畳であった。

(ii) 作業場には、そうして干しあげられ、よじれたままのヤシの葉も、たくさん、ガサガサと置かれていた。これらは、次に、以下のようにして磨かれる。

2m弱のヤシの葉(一枚)の一方に10cm大くらいの石(重り)を括りつけ、柱の上部に渡された丸い横木(丸太)に懸け下げる。他方の端を左手で持ち、この手をゆっくり上下させる(しごく)。石に右手を添えることもある。

丸太は、直径10cmくらいの、よく磨かれたもので、頭上5~60cmくらいのところに水平に渡される。これには、ふつう、アレカヤシの幹が用いられる。

丸太の肌と石の重量とを利用してヤシの葉面を磨くのであるが、発生する摩擦熱も必要とされているのかもしれない。

ヤシの葉面は、ここでツルツルとなめされた状態となる。これをまた、先のようなバームクーヘン型の巻物(直径20~30cm)の形で保存することもあるらしい。

なお、上記の内、(i)については、黄衣をまとった15歳の少年僧の作業するところを実見することができた。(ii)は、Edwin氏の実演による。聞けば、修業中の小僧さんが、遊んでお経の暗誦を怠ったような場合、罰として、「今日の1日、これだけやりなさい」といった形で、(ii)の作業が(特別に)課され、皆のみせしめ(さらし者)にされるようなこともあったという。

(2) 木炭粉は、何でもよい、昔は、白檀を燃やして作った炭粉などを用いたが、今は、ふつうの木のそれを用いるとされる。Edwin氏は、小皿の中で4~5片の木炭片とクルミ核1ヶとをこすり合せ、木炭の粉末を作られていた。煤すすの類でもよからう。

なお、この前日(3月30日)、筆者はダンブッラ(Dambulla)のランギリ・レストラン(Rangri Restaurant)を訪れたところ、この主人Saman Kodikara氏は、吸っていたタバコの灰をヤシ油に混ぜ、これをナイフで刻字したヤシの葉に擦り込んでみせた。安易な方法であるが、それなりに注意される。

(3) ヤシ油は、ココヤシから採取される。日常卑近な存在で、中小のビン入りで購入し、灯火、灯明、料理、その他に広く用いられる。

ココヤシは、スリランカの主要農産物の一であり、その実ポル(ココナツ)、葉、幹など、捨てるところのない形で利用されている。

(4) 鉄筆Stylusは、シンハラ語でPanhiṇḍaという。スリランカにおける鉄筆は、大小、長短、太細の形態、装飾など、さまざまのようだが、大体、一方の先は細く尖り、ここで文字を筆刻する。途中(中ほど)は細く丸く(ちょうど毛糸の編み棒のような形態)、他の一方は、平たいファン状、あるいは、2~3のダンゴを串ざしにしたような形態となっている。ファン状のところは、花卉や矢羽根のような形になっているものもあり、たいていは模様(装飾)が刻まれている。

Edwin氏の手許にあった鉄筆は、全長21cmくらいで、内、棒状部15cm、矢羽根部6cm、中ほどの太さ4mmくらい、矢羽根部の巾3cm弱(広い部分で)、同厚さ2~3mmといった形態であった。

また、筆者は、キャンディ市内で二本を入手したが¹⁰⁾、この内の一本は、銀製で、長さ26.7cm(内、棒状部16.2cm、矢羽根部約10.5cm)、他の一本は、真鍮製で、長さ27.7cm(内、棒状部18cm、矢羽根部9.7cm)であり、ともに、中ほどに丸いこぶ(1.5cm大)を有し、矢羽根部には細かな模様が刻まれている。

キャンディの国立博物館には、こうした金属製の尖筆も、各種、展示されているが、頭部はファン状でなく、ちょうどダンゴを串ざしにしたような形態となっているもの、また、人面(人頭)型をなした形態となっているものなどもあり、中には、先細型の木製鞘を伴うものもあった。市内の骨董店には、大型の鉄筆と大ぶりのナイフ(刃わたり25cm、柄頭に象の歯を用い、彫刻を施す)との二本を一つの鞘(タリポットヤシの幹で作る)に収納する豪華な形態のものも売られている。

後に引く“Catalogue of Palm Leaf Manuscripts in the Library of the Colombo Museum” Vol. 1 (1938年)は、巻頭にStyles (Plate 1)や貝葉本(Plate 2~6)の図版(モノクロ写真)を掲げる。そのStylesとしては、矢羽根型のもの二本とダンゴ型の五本とがみえている。前者は、それぞれ単品のようなのだが、後者は、長・短等を取り揃えて一セットにしたものであり、金属製とおぼしき鞘(case)に納めるようになっていいる。鞘は、ちょうど、からかさを押しつぶしたような形態をしている。五本の尖筆は、筆刻する文字やイラストの大小、曲直、網かけ、その他の用途によって使い分けていくものである。

鉄筆の一端の平たい部分がどのような用途にあるのか、これについて伺ってみたが、昔はいろいろあった、今はバランスをとるためのものだ、ヤシの葉を削ることに用いない、とのことであった¹⁵⁾。

鉄筆の使用方法は、我々が鉛筆・ペンを用いるのと全く同様である。親指・人差指等でその先端部を持ち、細かな文字を刻んでいく。

鉄製だから鉄筆というが、この尖筆の材には、銅や銀、また、竹や角なども用いられたらしい。

鉄筆には、また、上記と大きく異なる、小型の折り畳み形式のものがある。これは、鞘部(case)の一端に折り畳み式の鉄筆とナイフとが固定され、他の端に真鍮製等による小さな円盤(2.0~2.5cm)が着いている。鞘部全体の長さは10cm余で、手の内にも入るほどであり、その不用時には、鉄筆もナイフもここに収める。鞘に水牛の角を用いたりすることもある。

円盤は、その不用時には、これを机上に立たせておくためのものである。キャンディの国立博物館には、同趣の鉄筆類が、あたかもペンギンが両手を広げて立っているかのような形で展示されている。

(5) ハサミ

ヤシの葉を裁断するため、Edwin氏の用いていたハサミは、長さ20cmくらいの鉄製の和バサミ風のものであった。平凡なものであろう。

ナイフであれ、ハサミであれ、その筆刻の後に裁断用具を用いるという点には注意される。日常的には、書いた文字量・言語量に応じて料紙を切り取り、これを文書となす、という書記形態・書記生活もが窺えるからである。

大部の写経などの場合には、あらかじめ、裁断・整形された、いわば、それなりに規格化されたヤシの葉が用いられたであろう。しかし、日常的には、そうした形態ばかりでなく、料紙の長短(大小)を文書の内容量に応じて、適宜、決めていくという方法も行われたとみうけ

られる。

貝葉(本)の試作は、大体、以上のような素材、用具、方法等をもって行われるようである。Edwin氏の実演は、部外者向けの、かりそめのものである。そのせいでもあろうか、総じて、その筆記作業は、比較的簡易であり、必ずしも複雑な仕事ではないかのような印象を受けた。これは、意外なことであった。

こうした素材から成る作品は、今日、とかく特殊視され、問題視されがちである。そのため、その作成作業は複雑な手続きを必要とするものと思いがちである。確かに、貴重な經典などの筆写などは、後に触れるような慎重な態度・方法で行われたであろう。しかし、本来、書記するということは、識字者や識字層についての問題もあろうが、もっと身近かに日常的で、平凡な存在のものであったはずである。その書記素材は、まず、日常卑近の、かつ、日常不可欠のものであり、そうしたなかに、目的に応じたさまざまな使途・用法があったと推測されよう。

作業場には、また、特製のガラスケース(木枠、四本足)に収めた大型の貝葉經典十七点が安置されていた¹⁶⁾。新写の大蔵経で、巾7~8cm、長さ70~80cmくらい。料紙は、計12,000枚余。表紙は木製、彫刻があるが、白木のままで彩色はない。上部を手前に倒し、棚の奥へ水平に差し込んだような形で横たえられている。綴じ穴は二穴。皆、白い長い紐がしっかりとかけられている。

筆者のEdwin氏に学んだ今一つは、そうした綴じ紐の利用方法である。即ち、スリランカの貝葉經典は二穴を有するが、綴じ紐は、その左側(表紙の上から下へ)に通すのみで右側の穴は使わない。右穴に通さなくても、紐は長めのものが用いられ、これは、読書を中断する場合などに、読みさしのところを(右手で)軽く一巻きしたりして、いわゆる葉しおりのようにして用いられ、また、読書後は、全体の結束に用いられたりするのである。

貝葉本を巻き納める場合には一定の方式で紐を巻き、最終的には二ヶ所で括られる。

前表紙の左穴には紐の頭が位置するが、その頭を隠すため、また、装飾のため、突起型(コブ状)の止め金具(boss)が取り付けられる。

なお、Edwin氏の机上には、上述のような用材、用具などの他、貝葉本の整形・矯正用バインダー板、ホロスコープの貝葉、貝葉本の木製表紙なども見られた。

3 キャンディの骨董品店における見聞

キャンディ市内には、骨董品店が五軒ほどあるという。その内の一軒、Prema Brothers店に立ち寄り、貝葉

本十三点、金属製尖筆四点を見せてもらった。

貝葉本は、比較的新しいもののようにみうけられたが、内一点は、表紙に銀飾りが施され、ガラス玉がちりばめられていた（こうした装飾経は、仏歯寺にも多く保管あされている）。これらの素材は、タリポットヤシの葉であり、シンハラ文字でパーリ語をのしたものもあった（表裏に七行を記す、二穴、左穴に紐）。

何点かの医書があったが、見たところ、これらの場合は黒表紙（木製）の小型本という点で共通しているようである（一穴本、二穴本）。

さて、この店においては、また、“Explore Sri Lanka”と題する薄手の英文雑誌を見せられた（A4判大くらい、左中右の三欄構成）。近年の刊行のものらしいが、残念なことに刊記を控えるのを失した。

この表紙には、ヤシの葉に刻字している二人の僧のカラー写真が用いられ、誌中には、これに応じて、“The Ancient Art of Ola Writing”と題する記事が掲載されている（4ページ分）。

表紙の図版によると、二人の僧は、偏袒右肩に黄色の法衣をまとい、厚目の敷物に跏趺したような形で坐り、それぞれ右手で長い金属製尖筆の先端を持って筆写している。膝の上に布を懸け、その膝頭の上に三、四枚ほどのOla（料紙）を、左手の指で下側から重ねつまみ、これに刻字しているのである¹⁷⁾。写される側の本（手本）は、目前の敷物を敷いた机の上に置かれている。

ところで、店頭でのこの雑誌をみせられた時、実は、これを吟味するゆとりも手写する時間もなかった。ただ、念のため、見開き写真四枚を撮らせてもらったのであるが、帰国して調べてみると、参考すべき事項も少なくないことがわかった。もっと丁寧に撮影すべきだったと悔まれるが、今となってはどうしようもない。手近に、同誌を所蔵する機関もないようである。

そこで、以下には、判読できる範囲内で、記事の和訳を試みたい。文中（ ）印は私意、…《不詳》と記すのは、写真が不鮮明で判読できない箇所を意味する。状況によっては、原文における原語を留め、そのまま併記することがある。

〔和訳〕《大見出》《記事の1ページ目》

ヤシの葉に書記する古代技術

The Ancient Art of Ola Writing (〜部
は大書)

《中見出》

スリランカでは、オーラは紙に先行する、

Ola pre-dates paper in Sri Lanka

と、フローレンス・ラットワッテはいう。

says Florence Ratwatte

通行のパルプ紙 wood-pulp paperが、スリランカに姿を現した時期についての記録はない。紙が入って来た時、スリランカ人 Sri Lankansは、既に、彼等自身、独自に手当してcured、オーラolaと称されるヤシの葉製の料紙palm-leaf writing paperを開発していた。キリスト降誕のはるか以前、オーラは、広く……《2、3語不詳》、丈夫な……《1、2語不詳》、写本に用いられていた。

《1行あき》

スリランカにおける仏教の伝来は、……《数語不詳》B.C.3世紀である。仏法Dhamma (doctrine)を、その本来の正しい形で記録し、保存しなければならないという必要性は、文字の読み書きや書記技術の発展をもたらすこととなった。オーラの葉ola leafに字を書く技術は、おそらく、仏教伝来と同じく、インドから伝わったとみられる。

《1行あき》

その初期において（そして、地方社会では、今日でも）、子供たちの教育は、村の寺院の仏教僧によって行われていた。《2行分不詳》…

《2ページ目》《左欄、3段落分の計30余行分、不詳》

《1行あき》

オーラ典籍ola leaf booksとその書記技術についての最初の記録はB.C.1世紀にある、即ち、仏典がマータレMataleのアル・ヴィハーラAlu Viharaの石窟寺院において書き留められた時である。アル・ヴィハーラが選ばれたのは、当時、争いで荒れていたアヌラダプラAnuradhapraの首都から時間的にも距離的にも隔っていたからである。歴史書マハーヴァンサMahavamsa¹⁸⁾によれば、500人の僧が同寺に集まり、三蔵Tripitakaを文字で書き記した《とある》¹⁹⁾。三蔵とは、仏法の三つの容れ物という意味で、その本来の正しい形の仏教の、パーリ語による教理をいう。

《1行あき》

それら最初のオーラの写本は、マータレが…《中欄、2、3語不詳》の間に破壊された。それ以来、…《2行半不詳》、そして、オーラに書く技術は、今日なお、そこで実践しているところを見ることができる。

《小見出》

オーラは、聖なる仏典用の料紙scripturesだけではなく、この国のパピルスpapyrusでもあった²⁰⁾。

オーラは、今日でも、紀元前におけると全く同様に、タリポットヤシtalipot palm (Corypha umbraculifera)の葉の細片で調べられる。このヤシは、スリラン

カの高約900m以下の山麓の、暑い、湿気の多い溪谷によく育ち、巨大な（径5mくらい）扇形の葉をもっている。このタリポットヤシは、壮大な花が…（2語不詳）勢いよく咲き、そして、実をつけた後、枯死する。開花は、それが25～30年たって成長した時にのみ、始まる。

（1行あき）

オーラに供されるのは、その若葉であり…（2行半分不詳）…

（右欄、初段落の5行分と次段落の7行分、不詳、葉の調製法を記すか）…約1時間…（前後不詳）ペプシン（蛋白質分）を含んでいるところの…（2語不詳）は、パパイヤの木の葉や幹stemsから採るミルク状の分泌液である。（これらを）調合してボイルすることは、タリポットヤシの葉を保護し、そのペプシンはそれを柔軟にする。

（1行あき）

タリポットヤシの葉は、それから3昼夜の間for three days and nights、ひらく乾かされ、太陽と夜露sun and dewfallにさらされる。ブロンドの調製された細長い葉片は、ここで軟かくなり、そして、ふつうは、木を燃やす煙が耐久性を増すように、キッチンの上階に貯えられる。

書記の用とする時、オーラの葉の両面（表裏）は、檳榔椰子ヤシの木areca-nut treeの幹のなめらかな面にこすりつけて、美しい光沢を出す。磨かれた葉は、次に、種々の規格寸法に裁断される。この長さの最大のものは、3ハンドスパンthree handspans（約69cm）²¹⁾である。重要な典籍に用いられる一般的なサイズは、長さで2スパンと4指（約53.6cm）²²⁾であり、もっと小型のサイズは約45cm内外の長さである。広さ（紙幅）の同じ葉片（細長片）を作成するにも注意をする。

（1行あき）

After the finishing…（以下、1段落8行分不詳、綴じ穴について記すか）

（次段落の2行分、また、3ページ目左欄、1段落の8行分、不詳）

（1行あき）

（次段落の6行半分、不詳）、パーリ語Pali…（2行分不詳）、そして、医療の処方箋は、ふつうはシンハラ語で、すべてオーラに記録された。伝統的には、占星図（天宮図）の書は、いつも、長いオーラ葉いっぱいの巻物に記された²³⁾。

（1行あき）

書く必要ができた時、調製されたオーラ葉は、まとめられていた包みから一つずつ持って来られ、先の尖った

パンヒンダpanhindaと称される鉄筆stylusで筆記される。伝統的に、これらの鉄筆には、仏教的シンボルで精巧に彫刻されたにぎり²⁴⁾がついている。

（1行あき）

書記には三種類の鉄筆が用いられた、即ち、*hasthi*は、大きな字を書く時、*sinha*は、円形のものを書く時、そして、*hansa*は、優美な、小さな字を書く時、用いられた²⁵⁾。

（小見出）

オーラ典籍は、空白を埋めるために、いつでも図解されるというわけではない。

書記用のオーラ葉の調製が難しいため、学者たちはその節約につとめ、また、表現と書体（書記方法）との双方において、多くの節約手段を見出した。略語（省略形）とある種の音声記号——ちょうど、速記法のような——が用いられる。オーラ葉の損傷を避けるため、dotsは用いられず、文末に置く句読点stopsは、羽根形記号feather symbolで表わされる。文字の直立した配列は、時々、空白のむだをなくすために用いられる。

（1行あき）

オーラ葉に書くことは、高度に熟練した…（右欄、第1段落の9行分、次段落の6行分、不詳）

この過程は*katu*…（不詳）²⁶⁾煤を塗布して磨くこと、と称される。

（1行あき）

ランプの煤のペースト（ナチュラルなオイルランプのフレームから得られる）…（1語不詳）、*kekuna*（*Kokoona zeylanica*）²⁶⁾と称される樹脂が写本に擦り込まれる。…（2、3語不詳）煤のペーストは…（2、3語不詳）をくっきりさせる、…（2、3語不詳）シャープで鮮明な…（2、3語不詳）に書く…（2、3語不詳）金色のオーラの葉、肉太の…（3、4語不詳）のような（数語不詳）麦わら色の…（3、4語不詳）に描く…（不詳）。写本は、軟らかい布でふかれ、*kurakkan*（*mil-let* ; *Eleusine coracana*）²⁷⁾の（3、4語不詳）（の粉）で磨いてつやが出される。

（1行あき）

オーラ葉典籍は、たいてい、空白を埋めるために図解が入れられる。時折、2、3の装飾や図表の…（2、3語不詳）。

（図版—写本を読む僧と写本三点。写本の内一点は卷子本で、左端・右端は巻かれた状態。中央部に図絵らしきものがみえる。他二点は、1穴本、各1葉。

《説明文》僧は、オーラの葉に書かれた占星図を抜き読みする。

オーラ本の表紙は、いつでも美しく書き上げられ、そして、ぜいたくに飾り付けられる。彫りものが施され、塗料を塗った木、銅、銀、あるいは象牙さえもが用いられる。

（1行あき）

王の命令書は、しばしば、オーラに書かれ、表紙は美しく装飾された。キャンディ王朝時代（15世紀-19世紀）から伝わる実物は、渦巻の装飾で飾られ、金の縫い糸で刺繍が施され、赤や青の絹の小突起が着けられている。

（1行あき）

オーラの葉を作り、そして、書くという技術は、今、仏教僧侶の小さな宗団や2,3の伝統的な占星術師たちに限られている、—たとえ、オーラが、今なお、占星図の記録や儀式的目的に使用されているとしても。…（4ページ目右欄、初段落の9行分、次段落の内の5行分ほど、不詳）

実際に書いている、そして…（2,3語不詳）マータレにあるアル・ヴィハーラで見ることができる、キャンディ Kandyの…（2,3語不詳）、そして、たいていの寺は、いくらかのオーラ葉の写本を有しているであろう。それらは、訪問者の申し込み次第、見ることができよう。コロombo国立博物館には、古代の写本の陳列品がある²⁶⁾。

（1行あき）

どんな旅行者も、記念品としてオーラ葉本を買いたいという。税関当局は、古美術品として扱われるような50年以上たったオーラ葉典籍が（あるいは、何か他の品物でも）、国外に持ち出されることを許可しなでであろう。書写年代のより新しいオーラ葉典籍の持ち出しでも許されないであろう、—それらが古美術品ではないと証明する明確な方法がないからである。

（以上）

和訳は、以上である。文中に挿入されたモノクロ図版五点の内には、横に長い巻き物状の貝葉本が写っているものもある（注23参照）。これは占星術（horoscope reading）と説明されるが、貝葉典籍・文書の内には、用途や性格により、卷子本仕立も存在していたところに注目される。

文中、不詳として残したところが少なくない。図版の説明文にも読めないものがある。今後の調査に委ねたい。

4 1930年代における作成記録

コロombo国立博物館には、W.A.DE Silva氏編

“Catalogue of Palm Leaf Manuscripts in the Library of the Colombo Museum” Vol. 1の刊行がある（1938年）。

この巻頭に位置するINTRODUCTION（同氏筆、24ページ分〈VII~XXIV〉、1938年3月、コロombo）のなかには、貝葉本の素材、形態、作成方法などに関する記事もみえている。

今から50余年ほど前の記述ではあるが、むしろ、それだけに、既に、状況も大きく変わってしまった今日からすれば、貝葉本の、より本来的な様相を知る上で、貴重な文献であると認められよう。以下には、その要目を抄出し、和訳しておきたい。施注は、すべて私意による。

意識した方が楽だと思われるところも少なくないが、原文の細かなことばづかいや語句は、できるだけそのままに伝えるべきであろう。原文の誤解、誤訳については、大方の御叱正をいただき、後日に、修正していきたい。なお、シンハラ語、サンスクリット語、パーリ語、また、国名（地名）、人名などについては、原文の綴字を残すことがある。（ ）印は私意。

[和訳]

《前略、13ページの28行目まで省略》

《13ページ、29行目から訳す》

書くことwritingは、最も早い時期からシンハラ人 Sinhalese に知られていた。マハーヴァンサ Mahavamsa²⁹⁾は、B.C.500年も昔から文字を書いていたと伝える、しかし、この時期の書物、あるいは、記録は発見されていない。セイロンCeylonにおける文筆活動は、B.C.300年頃、仏教の導入の時期まで溯ることができる。

二種類のヤシから得られる葉が、書記writingの目的で用いられる。パルミラヤシPalmyra (*Borassus flabelliformis* L.)は、その一つである、しかし、その調製された葉は、たいてい、レターやノートを書く場合に用いられ、重要な書物を書く場合には用いられない。実際、あらゆる貴重な書物は、タリポットヤシTalipot palm (*Corypha umbraculifera* L.)の調製された葉に筆記される。コリファヤシCoryphaは、最も大きなヤシの内の一つで、セイロンでは、40~80フィート（12~24m）の高さまで成長する。この木が成長し切るまでには、40~100年を要する。この木が枯死する時、その樹頂から20フィート（6m）を越える高さまで花房を放出する。

書記用の葉を調製するための素材は、こうしたヤシの若い木から、しかも、若くてまだ開かない幼葉budsから採取される。それぞれの幼葉は、10~20フィート（3

～6 m)の長さであり、80枚から100枚の節葉leafletsをもっている。葉身は、それぞれの節葉にある主脈ribで二ツ折になっており、滑らかで強韌で、そして、クリームがかった色をしている。

書記用の葉の調製には、多大の注意が払われる。求められる素材は、重量においては軽く、色においては明るく、生地においては強く、そして、性能においては耐久力のあるものである。若い木は吟味して選ばれ、そして、幼葉がそろそろ開こうとする兆しを見せた時、葉は切って離され、そして、切り開かれ、葉の中の節葉はそれぞればらばらにされ、そして、一つずつ取り外される。節葉の中脈midribsは取り除かれ、そして、軽く巻いた葉身の細長い切れは、冷水cold waterで満たされた深なべpotに浸される。なべvesselは、その水が徐々に沸いて、その温度が変化した後、沸騰点に達するまで、弱火にかけられる。そして、その葉は、3時間から4時間、そのままぐつぐつ煮続けられる。その葉は取り出され、太陽の強烈な温度the sun's full heatにさらさないよう注意しながら、3日間、ひなたでin the sun³⁰⁾乾かされる。続いて、その葉は、戸外で、3晩、夜露にさらされる³¹⁾。ヤシの葉は、これで軟らかくなる。

こうして調えられた葉身は、ロール状に巻かれ、その後、磨いて仕上げする工程に委ねられる。磨く時、それぞれの葉身は引き出され、その一端に1個の重りが着けられる。その葉は、それから、手頃な高さで2本の柱に結び渡された丸太の滑らかな面に当てて、強く引き、上げ下げされる。ふつう、用いられるこの丸太は、アレカヤシareca palm (*Areca catechu* L.)³²⁾のつるつるになった幹が用いられる。

(14ページ)

貝葉本用の葉Book leavesは、葉身を一定の長さに切って作成される。平均的な貝葉の長さは、9インチから32インチ(22.5cmから80cm)に及び、その幅は、2インチから2¾インチ(約5cmから約7cm)に及ぶ。貝葉の長さは、その葉身のサイズ次第である。それぞれの貝葉は、その長さのどの部分も、ほぼ同じ幅をもたせなければならない。葉身は、その先端で狭くなっている、つまり、この貝葉の長さを決めるに際し、この点が考慮に入れられる。より大きな貝葉は、たいてい、ふ厚い書物—たとえば、三蔵經典Pitaka Texts³³⁾や註釈書のような—となる重要な写本を写す場合に使用される。本生経註釈Jātakattha Kathā³⁴⁾やシンハラ語の本生経本Sinhalese Jātaka Potaは、それぞれ、1,000葉を越えるものであり、27.5インチから32インチ(約69cmから80cm)の長さ、2.5インチから2¾インチ(6.25cmから6.9

cm)の幅の貝葉に書かれている。こうした貝葉が、求められる長さで裁断されて後、それらは、鋼鉄製の穿孔器を用いて二穴two holesをうがたれる。うがたれる二つの穴の間隔は一定のルールによる。

“葉を三つに折りなさい、それを広げ、再びそれを四つに折りなさい、そして、いっばいに広げなさい。その二回の折りによってできたり折り目の間で、二穴をうがちなさい。”(これは次を英訳したもの)

(続いて、シンハラ字によるサンスクリット語のverseで上記と同じことが記されている。省略。)

こうした長さで穿孔された貝葉は、二穴それぞれを通して、かつ、前後両サイドの木製表紙を通して、通し目釘で一緒に綴じられる。この貝葉の束は、しっかりと締められ、ひとまとめに圧縮される。左右天地の小口に、焼けたコテが当てられ、ふぞろいにはみ出した部分は焼いて除去され、貝葉全体は、一定の長さと同幅に調えられ。この焼き焦がすという工程は、また、貝葉本を湿気やかびから確実に保護することになる。

ヤシの葉の書記は、スチールの先を尖らせた尖筆styleで行われる。尖筆の先端は、時々、写字者copyistがみずから携帯している、オイルを塗った砥石でとがれる。文字を整えるラインは、貝葉の表面に刻みを入れて作られる。尖筆は、熟練した技術で使用されねばならない。尖筆は、その書記作業に適したものが用いられる。その形、その長さ、また、その重さは、筆写者が、就業中、肉体的に楽であるように^{あんなばい}按排される³⁵⁾。尖筆の長さは10から20インチ(約25から50cm)と多様である。その長さがどのようであっても、尖筆は、鋭く尖った先端部に加え、四つ(マフ)の部分^(マフ)を有する。これは、chatra(サンジェード)、patra(葉)、nala(管)、gandam(球)、そして、lekaniya(筆としての身部)³⁶⁾として知られている。これらの部分は、それらの一般的な形状のとおり命名されている。これらの部分のそれぞれの長さの割合は、決った比率を有している³⁷⁾。もし、その尖筆が、20の部分に分けられるとすれば、chatraは4、patraは2、nalaは3、gandamは1、そして、lekaniyaは10である³⁸⁾。

寸法は、次のように記されている：—

(続いて、シンハラ字によるサンスクリット語のverseで、catra以下、上記と同じ比率が記されているが、省略する)

尖筆は、金、銀、銅、即ち、真鍮のような金属で作られ、装飾があってもなくても、鋭い筆先を形成する鋼鉄が、その先端に取り着けられている。

ヤシの葉に筆刻される文字の大きさは、一律である。

次の一節verseは、文字を筆刻する際に守らねばならない作法について述べている――

（続いて、シンハラ字によるサンスクリット語のverseで、次と同じことが記されているが、省略する）

“均一の軽い力で、その下部、上部、側部、頭部の一筆一筆をうまく調えながら文字を書きなさい。”

文字のふつうの大きさは、1インチ（約2.5cm）に7～8字、2～2.5インチ（約5～6.3cm）幅の一葉に8～10行である。例外があり、たとえば、儀式的な重要な行事の折に朗唱される経Sūtraを集めた大ピリット書Maha Pirit Pota³⁹⁾の場合においては、文字は大きく、1インチに約4字、2.5インチ幅の一葉に4行である。

シンハラ文字は、曲線とその円弧から成り立っている。文字には、頭部、体部、上方への運筆、下方への運筆、そして、側部の運筆がある。写字者たちには三流派があり⁴⁰⁾、各々は、文字を記していく場合に、それぞれ独自の字形を有している。これらの字形は、[キ] 註キ (haja) 象、[ク] 註ク (sinha) ライオン、[ケ] 註ケ (hamsa) 白鳥として知られている。“象”では、文字は豊満で、そして、丸まっており、“ライオン”では、それらは方形をしており、“白鳥”では、これらは肉細で幅が狭い。こうした字形についての綿密な研究により、通例、その写本の作成された地域を特定することができる。

（15ページ）

写本のページ付けは、各葉面（各ページ）毎ではなく、各葉毎に行われる。一葉に表裏二面をもつ料紙は、初めの葉面のみ、ページ付けを行う。書籍の第一葉には、縁起のよいことばSvasti [コ] 註コ⁴¹⁾ が、その下に[サ] 註サ kaを伴って位置し、そして、次下の各葉には、kā [シ] 註シ、その他が記される、―― これらは、サンスクリットの字母Sanskrit alphabetの、34ケの子音が、14ケの母音を、また、子音と16とおりの結合をするanusvara・ñg⁴²⁾ やVisarga⁴³⁾ を伴ってできる、総計544ケの記号signsである。Anusvara・は、[ス] 註ス、[セ] 註セ などのように、また、一つ（の円）をもう一つの上部に置いた二つの円をもつVisarga（氣息音）は、[ソ] 註ソ、[タ] 註タ、などのように書かれる。

次は、写本のページ付けに使用される544ケの記号である：――

（[チ] 註チ、以下、34行、各行16ケ、総計544ケの記号が列挙されている。省略する。）

（16ページ）

本の葉数が544を超える場合には、ka [ツ] 註ツ に dva [テ] 註テ⁴⁴⁾（第二）という語を付け、もう一度始める。もし、三度目に入れば、[ト] 註ト tri（第三）⁴⁵⁾ という語が現われる。ある世俗書には、アルファベットの文字の代りに特異な記号が用いられる。これらの図形集としては、Lit Lakuna⁴⁶⁾ 即ち、占星術の天宮図に用いられる記号集などが知られている。

次は、その数字の字体表である：――

（[ナ] 註ナ 以下、総計19ケの記号が列挙されている。省略。）

上記の記号の代りに、シンハラ語の字母の一定の文字がしきりに用いられる；

（[ニ] 註ニ 以下、総計10ケの記号が列挙されている。省略）

（17ページ）

写本における訂正は、文字を書く行の下に行われ、こうした訂正行はDaru Pela（子供の文字行）⁴⁷⁾ として知られる。削られねばならない語や段落がある場合、その語や段落の両端は二個の括弧^{かっこ}で括られる。この行為はVarahanとして知られる。

今日、見出される写本は、現代文字で書かれている。パーリ語やサンスクリット語と混和する前のシンハラ語は、10ケの母音と20ケの子音で構成されていた、即ち：――

（30ケの記号が列挙されている。省略。）

（中略、17ページ10行目から21ページ29行目まで省略する。文字や符号の形態・用法、また、書物の内容、性格、書き出し、その他についての説明がある。）

（21ページ、30行目から）

貝葉の書記においては、初めに筆刻された文字行が薄く、輪郭もはっきりしないので、写本として使用される前に、文字を黒くしなければならない。

文字を黒くすることは、樹脂 [ヌ] 註ヌ⁴⁸⁾ を蒸留して調製されるインクをもって行われ、樹脂には、焼いた葉を粉碎し、ふるいにかけて炭粉を加える。通例、このために供される葉は、わたの木cotton plant (Gossypium)⁵⁰⁾ のそれである。そのオイルを調製する時に利用される樹脂は、古い砂鉱床に出現するところの、稲田や湿地性の地所から掘り出される。蒸留器は、三分の二まで、Kākuna [ネ] 註ネ (Canarium zeylanicum Bl)⁵¹⁾ や Divul [ノ] 註ノ (Feronia elephantum Corr.)⁵²⁾ のような木の、樹脂を多く含んだいくらかの根茎をいっしょにして、その樹脂で満たされる。

蒸留器は、頂部を粘土で封じられ、火にかけられる。火に、あまり近くすると、蒸留器の内容物が焼け焦がさ

れてしまうので、1.5フィート(約45cm)離す。加熱は、樹脂を多く含んだオイルが蒸留器の管から流れ出てくるまで続けられる。このオイルは、暗褐色をしている。オイルと焼いた葉の粉末とから成る濃い真黒な混合物は、親指と4本指との間に持たれたくず布の切れ端に着けられ、そして、ヤシの葉の、余白も含め、その全面すべてに、ゆっくりと塗り着けられる。その葉面は、次に、ふりいでこした米のぬかで、きれいにふかれる。このぬかは、その表面から、油っこい樹脂に富む物質を取り去り、筆刻された文字は、濃い黒色のまま残る。樹脂を多く含むオイルは、また、この貝葉を保護する働きも有している。

(中略、21ページ44行目から24ページ16行目まで省略する。スリランカの写本の年代性、五種の暦などについての説明がある。)

(24ページ、17行目から)

貝葉写本は、いつでも、図解されているわけではなく、装飾的な頭文字initial lettersをもつわけでもない。一般的なJātaka物語(注34参照)の写本の詩節のなかには、Vessantara Jātaka⁵³⁾のように、線画風の図解が見出される。これは、たいてい、仏教寺院の壁に絵がかけられた、そうした物語に関する着色画(注34参照)の後にかかっている図解である。医術、占星術、そして、呪文(マントラ)⁵⁴⁾に関する書物においては、写本は、しきりに、本文内容やyantra⁵⁵⁾の形体を説明しようとする図形diagramsで図解される。

貝葉写本に現われる図解は、一般的に、その職人の趣味と技量を示している。

完成した写本は、それが、実際に、図書館に配置されるような本となるまでに、さらなる過程を通過しなければならない。

こうした過程の第一は、二枚の書表紙を備えることである。これらの表紙は、書物本体の貝葉より、わずかばかり張り出した大きさに作られる。その縁は斜角をつけられ、貝葉本体に接する、その内面は、平らに、なめらかに作られ、そして、時には、彩色されている。

貝葉本の表紙は、ふつう、Ebony (*Diospyros ebenum* Koen.)⁵⁶⁾、Gammalu (*Pterocarpus marsupium* Roxb.)⁵⁷⁾、Iron wood (*Mesua ferrea* L.)⁵⁸⁾、Val sapu (*Michelia nilagirica* Zent.)⁵⁹⁾、Milla (*Vitex altissima* Roxb.)⁶⁰⁾、そして、Jak (*Artocarpus integrifolia* Roxb.)⁶¹⁾のような、堅材で作られている。それらは、よく磨かれ、しばしば、顔料、また、ラックによる彩色画で装飾される。彫刻された板、銀、金、象牙で飾られた板、そして、鼈甲製の表

紙、また、宝石や準宝石のはめ込まれた板もある。幾点かの貝葉本の表紙は、銀、金、また、象牙で作られ、熟練した職人たちによる装飾的な意匠で仕上げられている。こうした表紙における彫刻、図絵、また、打出し模様は、通例、《先端が》渦巻模様、また、花柄、そして、幾可学的なデザインで構成される。

書物の貝葉とその表紙は、重ねた貝葉と前後の表紙の、うがたれた二穴の左側の穴を貫き通すところの紐で、いっしょに括られる。紐は、定まったしきりどおりに作成される。それは、綿糸、即ち、Niyanda leaf (*Sansevieria zeylanica* Willd.)の繊維から作った糸で作成される。その糸yarnは、漂白しないままで、そして、軟らかい。これらの四本、または、八本の糸strandsは、いっしょに編まれる。ふつうは、四本の糸が使用される場合は二本の紐stringsが、また、八本の糸が使用される場合は二組の紐が、それぞれ用いられ、一方は青く、他方は赤く、または、両方とも青く、あるいは、赤く、着色される。編まれた紐は、軟らかく、そして、太い。四本の糸が使用される場合、その形態thicknessは平たくなった外観を呈し、そして、八本が使用される場合、その形態は丸い。

この紐は、貝葉をいっしょに括る。紐は、貝葉を扱いやすくするため、長いままにされる。貝葉本が重ねたたまれる時、紐は、その左(左穴)から始めて、たがいにびたりとくっつけて10回、それから、本の中央を5回、そして、右方に《移って》⁶²⁾3回、また、3回、そして、二組を交差して、巻かれる。

(続いて、シンハラ字によるサンスクリット語のverseで、上記と同じ巻き方が記されている。省略。)

その紐の一端には、金、あるいは、銀、あるいは、堅い木、あるいは、コインで作られ、その本の巻頭に位置する前表紙の穴(左穴)の上に置かれた、装飾用の大メダルmedallianが結び着けられる。その紐の他の一端には、飾り房、あるいは、ビーズが結び着けられる。

ヤシの葉に、文字なりメッセージなりが書かれる場合、それが受取人に発送される前に、重ねたたまれ、そして、ヤシの葉の細片 [ハ] ḥa vārikendaで縛られる。もし、これが一巻きであれば、この書状は敵対者に、二巻きであれば、友人に、三巻きであれば、親戚に、四巻きであれば、その家族の誰かに、五巻きであれば、両親か兄弟に、六巻きであれば、恩師に、そして、七巻きであれば、国王に向けて、それぞれ、意図されたものである。

(続いて、シンハラ字によるサンスクリット語のverseで、上記と同じ巻き方が記されている。省

略。)

仏典は、崇敬され、絹、または、上質の綿布で包まれる。こうした写本は、単なる書物“Pota (本)”ではなく、“Potvahanse”高貴な、即ち、崇拜すべき書物、して知られている。

(25ページ)

ヤシの葉に書物を写していくことは、訓練と熟練を要する技術である。文字学習は、仏教寺院学校Buddhist Pansala (Temple) Schools⁶⁴に通う児童の教育の一部である⁶⁵。その学習の第一段階は、砂板sand board⁶⁶の上に文字をなぞり書きすることである。細かな、ふるいにかけられた砂が、地面の上か小台の上かに置かれた一枚の板の上に広げられ、それぞれの字母each letter of the alphabetを大きな字で書く。生徒は、文字の名前the name of the letterとその説明its description⁶⁷とを繰り返し、そして、先生の文字の上に、彼の中指で、正しい書き出し“head (文字の起筆部)”で書き始めること、また、正しい書き終わり“foot (文字の終筆部)”で書き終わることを、なぞり書きする。生徒は、その文字の説明、発音、そして、字形に精通するようになるまで、それを繰り返し、なぞり書きする。たとえば、a[ヒ] ḥi は、頭頂部で起筆し、下行曲線を下方へたどり下ろし、そして、輪形部の中で上方へ線を上げ、その文字の頭部に調和する曲線をつけて書き終えるよう、なぞり書きする。この文字全体は、途中の切れることのない、一筆書きでなぞられる。字母の他の文字も、同様になぞり書きされる。

活字体にならないシンハラ文字を書くには、決まりがある。事実、すべての文字は、文字の起筆部で始まってその終筆部で終わるまで、途切れることのない一筆書きで書かれねばならない。生徒が砂板で文字のなぞり書きに精通した後、彼は、それらを砂の上に、みずからの責任で、写していく。

書記練習の第二段階は、ヤシの葉で、通例は、Palmyra palm (*Borassus flabelliformis*) の葉の細片で、行われる。これらの葉の上に、先生はUlkaṭuva [フ] ḥa⁶⁸として知られる、先を鈍くした尖筆blunt styleで字を書く。生徒は、この尖筆の使い方と、ヤシの葉に書かれたその文字の上をそれでなぞり書きすることを学ぶ。文字は、彼が文字面をなぞってその葉を彫り抜いてしまうまで、幾度もなぞり書きされる。この過程は、“Satahan Kāpuma” [へ] ḥa 下図を切ること⁶⁹として知られている。

次には、先生が、Talipat (*Corypha umbra-culifera*) で作った粗造の貝葉を使用し、模範の文字行

を書くという、第三の練習の段階がやってくる。生徒は、その行の下方に、その見出しの模写をしながら書いていく。この時、彼は先端を鋭く尖らせた尖筆Panhinda [木] ḥaを使用し、そして、貝葉に文字行を刻むことを学ぶ。書記練習の最終の段階は、調製されたTalipatの貝葉で、書写本に用いられるような細かな文字をもって行われる。

貝葉の筆者は、書物を目で読むことに熟達し、そして、写本を正確に書写できるように、語や文に精通しなければならず、また、彼が、複写本を作る、その原本における誤りを見抜くことができなければならない。

写本の作成は、主として、仏教の僧たちによって行われる。若干の俗人は、それを、商売として行っている。

(《中略、25ページ28行目から同42行目まで、及び、脚注を省く。セイロンの仏典は、南インド、中国、ビルマ、シャムへ伝わっていった、等の説明がある。》)

(26ページ、1行目から)

たいていの仏教寺院Vihāra (Buddhist Temples) では、写本をしまっておくための部屋は、別に設けられる。より重要な仏教寺院においては、その目的のため、別棟の建物を用意される。この図書室(《図書館》)は、Potgula⁷⁰として知られる。書物は、丈夫な木製の箱、あるいは、扉でしっかり締められる棚の上に配置される。仏教寺院の図書室は、法Dhamma— 仏陀Buddhaの教え—の保管所として尊敬される社会的機関の一部である。数々の仏教寺院は、写本の複写をさせるため、写字者を雇用する。図書室は、仏教寺院の威信を増す貴重な財産である。

写本のコレクションは、数々の地方の村における、そのVedarāla (医術者)、Nakat Rāla (占星術師)⁷¹、Kapurāla (神々をなだめる人)⁷²、そして、Kattādi Rāla (まじないをする人)⁷³の、また、善良な魂と邪悪な魂とをつなぐ儀式の家々で、見出される。そうした書物の大部分は、彼ら自身によって、彼らの仕事の不可欠な部分として維持される。これらのコレクションは、家族の中で、父から子へと伝えられる。その子は、彼の同僚から入手した本を複写することにより、それをさらに増やしていく。人は、彼自身のコレクションに持っていないかもしれない本の複写を得るため、長距離の旅をし、多大の時間と労力を費やしたものであった。

シンハラ文字で書かれた写本には、三種類の言語、即ち、シンハラ語、パーリ語、そして、サンスクリット語が見出される。シンハラ人により、共通して、かつ、日常に行われてきたシンハラ語は、2,500年にも及ぶ生命力を示しながら、存続し、成長し、そして、変化してき

た。それは、シンハラ人の生活変化にみずから順応し、折々に導入される新しい信仰cultsや新しい思想ideasをことばで表現してきた。

パーリ語の本は、仏教の導入とともに用いられるようになった⁷⁴⁾。シンハラ語は、速かにパーリ語から多くのものを吸収し、そして、仏教を解説するため、長大な註釈書や解説書が、シンハラ語で編纂された。

サンスクリット語は、当時⁷⁵⁾、芸術、科学、そして、文学に関する書物が著述された言語であった。侵略者が南インドからやって来た時⁷⁶⁾、シンハラ語は、新しい思想ideasを拒まなかった、そうした思想を表現することばを欠いていたためである。先生がビルマBurmaやシャムSiamからやって来た時⁷⁷⁾、シンハラ語は脇に押しやられることはなかった。西洋から入って来た侵略者⁷⁸⁾は、この国のことばに影響を与えることはできなかった、とはいっても、シンハラ語は、連続的に、ポルトガル語、ドイツ語、そして、英語の影響をこうむることとなり、こうした言語に由来する少数の語は、比較的広く一般に使用されてきている⁷⁹⁾。

ももとのシンハラ語は、Vijaya王子⁸⁰⁾と、彼に続いてこの島にやって来た移住者により、セイロンCeylonにもたらされた。彼らの言語は、定着し、そして、原住民、セイロンのYakkāによって使用されていた言語に取って代わるまでに成長した。Magadha Lāla⁸¹⁾、Vanga⁸²⁾、そして、Kālinga⁸³⁾で使用されていたこの言語は、各種方言をもつPrākritis⁸⁴⁾である；シンハラ語もまた、これらのインドの言語と同様に、一つのPrākritであった。

（後略、26ページ30行目以下を省く。）

（以上）

その要目の抄出、和訳は、以上である。貴重な、かつ、具体的な記述がみえており、いろいろな意味で興味深い。一部には、これまでに見聞したところと異なり、矛盾するようなどころもあるが、これも含め、全体的な追跡調査が必要であろう。

5 所蔵機関について

スリランカにおける貝葉文書・典籍は、仏教寺院や個人、博物館などに所蔵されている。

仏教寺院のそれは、キャンディの仏歯寺に代表される。

キャンディ(Kandy)は、スリランカの歴史上、最後の王朝(1594⁸⁵⁾～1815年)の都が置かれていたところであり、その仏歯寺は、釈尊の犬歯を納めた寺院として、仏教徒の絶大な尊崇の対象となっている。Temple of

the Sacred Tooth Relicと通称されるが、正しくは、Daladā Māligāva寺という。

仏歯寺の正門から右手に、遠くからでもよく目立つ白い八角堂Pattirippuvaが建っている。最後のキャンディ王ラージャシンハ王Sri Vikrama Rājasimha (1798～1815年)により、19世紀初めに建立されたものという。英国占領時代(1796～1948年)には留置所にされていたこともあるというが、今は、Potgula、即ち、図書室になっている(注70参照)。

この図書室には、壁面と中央の書架(ガラス、木製)いっぱい美装の貝葉本が納められている(若干の洋装本も所蔵する)。横に長くて厚い大型本、また、それほど厚くもない中型本が多く、ほとんどは仏教の経典かとみられる。

表紙は、木製で、装飾・彩色に富む。二穴の内の左方の穴に紐を通し、やはり、アル・ヴィハーラ寺におけると同じく、二ヶ所で括っている。但し、薄いものは、一ヶ所だけで括ることもある。

博物館では、キャンディとコロomboの国立博物館にその所蔵がある。

キャンディ国立博物館(Kandy National Museum)では、いろいろな貝葉本、また、金属製の各種の尖筆、Ola Leavesを磨いてつや出しをするための、(i)Patassaといわれる小型の二股器具や(ii)石のおもり(Stone weight)、絵や図形を描くための鉄製のコンパス(コンプレクション、18世紀)などがガラスケース内に展示されている。

貝葉本は、大小27点⁸⁶⁾が展示されている。パルミラヤシとタリポットヤシによるもので、大体、200～300年前位のものが多いとされる。各葉、表裏に渡り、シンハラ字で古シンハラ語、サンスクリット語などが記され、中には、細密文字を用いたり、図絵や彩色を有したりするものがある(表紙にも彩色のものあり)。

葉数(料紙数)の多い書物20点(蛇にかまれた時の処置法などの医書など)と、その数葉程度の7点(護符、まじない書など)とに二分されようが、後者は、おおむね、前者より小型で、図絵を伴うものが多い。

形態上、前者は、ふつうの横に長い形式で二穴方式(左穴に綴り紐)による(まれに、一穴方式もある)。後者は、しかし、そうばかりでもないようである。たとえば、その内の一つに、貝葉の数葉(6葉綴りのものが多い)を平行して並べ、それぞれの縁を糸で細かく、あるいは、3ヶ所で縫い綴って折本仕立てとしたものがある。しかも、これを横置きに用いたものもあれば、縦置きに用い

たものもある。また、開いた全面に大きく仏陀の絵を書くものもあれば、各葉それぞれに絵（ヒンドゥの神や蛇の絵など）や呪文、符号を書くものもある。こうした場合は、料紙の中ほどに綴り紐を通す穴は必要なく、現にそうしたケースが多いのであるが、中には、その中央に一穴、また、左右に二穴の綴り穴を有するものもある。これは、思うに、もと、全葉を重ねて綴り紐を通す形態にあったものが、後に改装されたのではなからうか。

後者には、また、別種の折本仕立ても2点ほどみられた。たとえば、シンハラ語、タミル語、英語で‘OLD OLA ALMANAC WITH CASE’（古いヤシの葉の曆書）と解説される1点は、料紙（ヤシの葉3葉）を長く継ぎ足していき（長い葉の端をぎこちなく糸で縫い継ぐ）、後、これを10cm前後の間隔で、山折り・谷折り交互に折りたたんだ形態となっている（18折）。同じくヤシの葉を縫い合せて作った専用の収納ケース（書帙・〈33, 190, 141〉、有帽形式）に納めるようになっていて、文字は、折られた各葉面の各々に横書きで記されているから（表裏とも4～5行。他の1点は一面に8行）、これは、明らかに当初から折本として仕立てられたものである。

その素材の材質からすれば、これらが、はたしてどれほどの耐久性を有していたか、不安に思われる⁸⁷⁾。しかし、こうした折本仕立て（二様）が、スリランカという貝葉文化圏に存在していたことにつき、我々は注目しておいてよいであろう。これは、先の卷子本仕立てについても同様である⁸⁸⁾

さて、貝葉本が最も多く所蔵されているのは、コロombo国立博物館（Colombo National Museum）である。ここには、その別館として図書館が併設されていて、5,000冊を超えるシンハラ語の貝葉本が所蔵されているという。閲覧は、会員制で、あらかじめ申し出なければならぬ⁸⁹⁾。

同博物館には、“Catalogue of Palm Leaf Manuscripts in the Library of the Colombo Museum”, Vol. 1 (1938年, Colombo, 412ページ, 26.5cm×29.4cm)の公刊があり、こうした博物館に所蔵される、ほとんどの価値ある貝葉本は、これに登録されている。

本書には、都合2,456点が登録され、英語で解説されている。内訳は、大体、次のようである。

Introduction

I Thēravāda (上座部) Buddhist Literature; Pāli, Sinhalese, and Sanskrit, in Sinhalese script

- (a) Vinaya (律藏)
- (b) Sutta (経藏)
- (c) Abhidhamma (論藏, 対法)
- (d) General
- (e) Additional Manuscripts

II Thēravāda Buddhist Literature; Pāli, in Burmese and Kāmbōdian script

- (a) Vinaya
- (b) Sutta
- (c) Abhidhamma

III History and Tradition

IV Grammar and Lexicography

V Prosody and Poetry

VI Art

Appendix— 補遺、書名索引〈ローマナイズとシンハラ字〉、著者索引〈ローマナイズ〉、事項索引〈ローマナイズ〉

各写本は、番号・書名、次いで、素材（ヤシの種類）、葉数（ページ数）、寸法（横・縦）、本文の行数と長さ、また、文字の形態・大小、所用言語、といった点について略記され、必要に応じて、その首なり尾なりの本文がシンハラ文字で翻字されている。

おわりに

本稿では、スリランカにおける貝葉文書・典籍の作成方法について述べてきた。具体的な様相が、かなり判明してきたように思われるが、第二節、第三節、第四節を較べてみると、補い合うところは多いものの、少異や不一致点も少なくない。今は、あえてこのままに併記し、後日の検討に委ねることとする。事情聴取や実情調査も続けなければならない。

スリランカにおける貝葉文書・典籍は、これ単独で終始するのではなく、同国における書記生活の全体、書記素材の全体の中において、検討すべきである。即ち、スリランカにおいても、金石文、——銅板文書、鉄券、刻文（石碑）などの存在に注意しなければならない。これらは、やはり、“書く”のではなく、“刻む”ところに成立している。今日、かなりの研究成果も報告されているが、私見でも、これらの書記素材は、その用途や形態等において、相互に関連し合っているようである。本稿では扱いきれないので、別の機会に言及していきたい。

本稿に先立ち、先には、海外や国内における貝葉文書・典籍の研究・所蔵機関について概観した（注1文献、三番目）。その後、南インドのマドラス（Madras）のア

ジア文化研究所³⁰⁾, ラオスのビエンチャン (Viangchan) の国立図書館, タイのチェンマイ (Chiang-Mai) のチェンマイ大学, インドネシアのジャワ島 (スダ地方) のボゴール (Bogor) のパンジャジャラン大学文化研究所, マレーシアの国立古文書館などにおける研究・所蔵 (マイクロフィルム化も含めて) を知った。こうした情報は, さらに追加できるであろうが, それぞれの素材, 形態, 内容, 作成方法, 筆記方法等には相違のあることも予想される。地域的, あるいは, 時間的 (通時的) 観点からの検討をふまえ, やがては, それぞれの相互関係, 影響関係についての考察も可能となろう。

('94, 5, 31 攔筆, 同9, 4 清書)

注

1) 拙稿「バリ島のロンタル (LONTAR) 文書について」, 『国語教育論叢』, 第3号, 1993年8月。

拙稿「インドにおける書写素材について」, 『平成五年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』, 1994年3月。

拙稿「貝葉文書・典籍 (Palm Leaf Manuscripts) について——書写素材史研究序説——」, 『島根大学教育学部紀要』, 第27巻第2号, 1994年3月。

2) No.109, Orutota, Gampaha, SriLanka在住。同氏は, かつて, 日本に3年間滞在されている (同志社大学留学, また, 北海道江差に修禅, 大阪・小倉等に日本事情を学ぶ)。

3) Geological Survey & Mines Bureau (No. 4 Galle Road, Dehiwala, SriLanka) 勤務。

4) 外務省外務報道官編集『世界の国一覽表 1994年版』, 1994年3月31日, 世界の動き社刊, および, 東京書籍編集部編集・発行『最新世界各国要覧』(7訂版), 1993年6月9日刊, などによる。

なお, スリランカの国内では, 道路標識などの一般的な公的標示は, シンハラ語, タミル語, 英語の三ヶ国語の併記によって行われる。

5) Albertine Gaur女史によれば, 書字に適した葉をつけるヤシは, 次の三者であり,

Talpat palm (*Corypha umbraculifera*)

Palmyra palm (*Borassus flabellifer*)

Lontar palm (*Corypha utan*)

特に, 東南アジアでは, 三番目の *Corypha utan* が用いられたとされる (A History of Writing, London: British Library, 1984年, 1992年, P.50,

また, *Writing Materials of the East*, London: British Library Board, 1979年, P.14)。

しかし, この *Corypha utan* については異論もある。次がそれである。

This latter (Lontar=*Corypha utan* のこと) is something of an enigma, as we have never been able to identify the Lontar. Whether this is because in its processed form it is not possible to tell the difference between *Corypha umbraculifera* and *Corypha utan*, or because in fact the use of the Lontar is only a tradition, we at present have no way of knowing. (Peter Lawson, "Palm leaf books and their conservation", *Library Conservation News*, Number 16, July, 1987)

6) *Koḷa* の異形 *kolē* も葉, 紙 (単数) を意味する。また, *kēkoḷa* = 紅茶の葉 tea leaves, *taṛa koḷa* = 草 grass, また, 関連して, *koḷapāta* = 緑色 green (名詞) などの語がある。

7) 関連して, *pata* = 木の葉 leaf of tree, *hasun pata* = 書簡・ふみ letter, といった異形, 意味・用法もある。

8) 一般的には, この方法は, インドの北部, などにおいて行われたようである。

9) *panhiṇḍa* は単数形で, 複数形は *pano*。類義語に, *pansit*。また, 関連して, *pānsalaya* (鉛筆), *pāna* (ペンナイフ) などの語がある。

10) 上原敬二著『樹木大図説Ⅲ』(有朋書店, 昭36, 4初版, 昭和52, 4第7刷, P.1169) によれば, ヤシ科, コリファヤシ (コウリバヤシ) *Corypha* 属に属し, 英名 Talipot Palm, 学名 *Corypha umbraculifera* L. (*Corypha* は, ギリシャ語の *koryphe*, 即ち, 山や丘の頂上の意で, 花房が樹頂に生ずるところに, あるいは, 葉が幹の頂部に冠状に生ずるところに因むという。種小名は, 傘に似た, の意), 日本ではコリバヤシ行李葉椰子と書くこともある。常緑大喬木, 雌雄同株, 高さ10~20~30m, 径0.8 (0.6~0.9)m, 環紋 (環状の葉痕) を有す。葉は頂生, 大扇形羽状 (「羽状」は掌状と改めるべきか, 筆者記), 径300~500cm, 裂片は80~100片, 深裂して線状披針形, 幅15cm, 鋭頭, 単尖, または, さらに, 2分裂する。葉柄は剛強, 長さ15~2~3m, 幅5~10cm, 狭い溝をなし, 縁辺に強鋭刺あり。肉穂花序 (両性花) は直立, 多数に分岐して円錐形 (シャンデリア状) をなす, 長さ3,000~9,000mm, 花は緑色 (白色, クリーム色, ま

たは、淡黄緑色とすべきか)、40~60年で開花し、結実すれば、枯死する。果実は球形、楕円体、径20~30mm、灰色堅硬、胚乳を植物象牙と称し、ボタンなどの装飾品に作る。葉は写経、日傘、屋根葺材、その他に作る。スリランカ(セイロンゾウゲヤシと称す)、マラバル、ジャワ、アングマン、南インドの産。

相賀徹夫編著『園芸植物大事典5』(小学館、1989年12月、P.91)によれば、その原産地は、スリランカ、インド南部のマラバル海岸で、標高600m以下の湿潤地帯に生育するとある。

なお、同属に、ジャフコリファヤシ(学名 *Corypha Gebanga* Blume)、ベンガルコリファヤシ(学名 *Corypha Taliera* Roxb.)があり、前者は、ジャワ、ベンガル、ミャンマー、マラヤに、後者は、ベンガル地方に産するという。ベンガルコリファヤシも貝葉写本に用いられた(O.P.Agrawal, 'Conservation of Manuscripts and Paintings of South-east Asia', 1984 Butter Worths, P.26)。[追記2]

- 11) タリポットヤシによるsun shade 3点が、コロソバ国立博物館に展示されている。糸を用いて葉をかがる。その葉は、雨よけ、陽よけ、テント代用等にも用いる。
- 12) 上原氏(注10文献、P.1163~1165)、その他によれば、属名Borassusは、ギリシャ語のborrassos、即ち、ヤシの実の皮、種小名labelliferは扇形を有するの意。日本名は、オウギヤシ、ウチワヤシ、中国名は、樹頭椶。常緑喬木、雌雄異株、高さ12~18~(30)m、径0.6~1m。直幹、無刺、環紋あり。葉は頂生叢出、掌状扇形で長さ100~150cm、先端は60~80片に分裂し、裂片は、さらに、先端2浅裂し、細い披針形、長さ45~90~120cm、葉柄は半円筒形で、長さ60~120cm、縁辺に刺状歯牙あり、3~4月と12月頃に開花、花は肉穂状花序につき小形、紅、または、黄色。果実は、7~8月に成熟、扁球形、10~20cm、褐色、中に、繊維状パルプに包まれた種子1~3個あり。種子は硬質。インド、スリランカ、マラヤ、ミャンマー、ベンガル、タイ、メコン川流域、熱帯アフリカ、エチオピアなどに産する。重要な産業植物とされ、砂糖、酒、ウチワ、屋根葺材、敷物、籠、ボラッサス繊維、建築材、船材などに利用される。

スリランカでは、ココヤシに次いで重視され、海拔1,000mまでも植栽されているが、インドには、数万町歩に及ぶ栽植地があるという。

なお、産地につき、沖縄東南植物楽園の御教示によ

れば、(大井田鶴子氏御調査)、オウギヤシは熱帯アフリカに原産し、アフリカ、インド、セイロン、ビルマ、マライなど広く分布し、その北方限界は北緯30度といわれる。インドのBengal州、Bihar州などからインド洋岸にかけて、また、Bombay, Goa, Calicutを経てMalabar Coast, Cape Comorinにかけて分布するが、半島南端のMadras以南の沿岸平地には特に多い。スリランカでは、ベンガル湾に面する東北部沿海(Jaffna辺)に多い。アジア西部では、ペルシャ湾岸に多く、東はビルマを経てシャム湾に達し、南下してインドネシア各地に及ぶ、とされる。北部マライの村落、タイの水田地帯にはふつうにみられるヤシといわれる。木村登「ヤシと人々の生活」、『熱帯農研集録』<農林水産省、熱帯農業研究センター>、No.33, 昭53.12, P.28, 阿部登著『ヤシの生活誌』、古今書院、1989年2月、その他、参照。

- 13) 小林良生「タイ国に貝葉“バイラーン”を求めて」、『百万塔』、第55号、1983年4月。
- 14) 1994年3月31日、Prema Brothers店にて。
- 15) ファン状の鉄筆につき、これはヨーロッパからの影響を受けたものではなかろうか。バリ島のPengerupak(あるいは、Pangoetik)などに較べると、その機能が、今一つ、明らかでない(拙稿、注1文献参照)。ヨーロッパのStyleは、昔、蠟板(waxed tablet)に文字を書く時に用いられ、そのファン部は、執筆のバランスをとり、また、ミステークをこすり消す(scrape away)ためのもの、元どおりに平らにならすためのものとされる(拙稿、注1文献、三番目、P.4、イリン著、八住利雄訳『イリン選集 書物の歴史』<1952年7月、岩崎書店、P.106>)、また、河村重治郎編『新クラウン英和辞典 改訂版』<三省堂、昭29.3初版、昭46.2改訂版・第71刷、P.1154、など>。

鉄筆が、いつから用いられ始めたか、それ以前における筆刻具はどのようなものであったか、などについての検討も必要である。

- 16) この背後の両側に、ヤシの葉製のファン(日よけ)2本が立てかけられている。
- 17) 中西亮著『文字に魅せられて』(同朋舎出版、1994年4月、P.124)には、タイの勅竿の曼亭寺の青年僧がバイラーン(老倭文)を刻んでいる写真一葉が掲出されている。これによると、右手に尖筆の先端を持ち、左手の指で貝葉4、5枚を、下側からつまみ持つ。刻字する場所は左膝頭であり、手本は目の前の籠の上に載せてある。

- 18) スリランカの正史の一つとされる大王統史。ダーツセーナ王(460~478)在位の時、仏教僧のマハーナーマにより、パーリ語で書かれた。和訳は、『南伝大蔵経』、第60巻に収める。これによれば、同国の仏教伝来は、B.C.243年、アショカ王の息子、マヒンダ長老によってもたらされたという(第13章)。
- 19) 従来は口伝によっていた三蔵を、その註釈とともに、初めて文字化したという。
- 20) それが特殊な存在でなく、一般的な書記用の料紙である、との意味であろう。
- 21) 今日、手近の英和辞典によれば、親指と小指とを張った長さ(ふつう約9インチ=23cm)を1spanという、とある。従って、3span=約27インチ=約69cm。
- 22) 同じく、英和辞典によれば、1指の指巾は、約 $\frac{1}{4}$ インチ=1.9cm、同指長は、約 $4\frac{1}{2}$ インチ=11.4cm。従って、2span+4指=約46cm+約1.9cm×4=約53.6cm。
- 23) オーラの長いままの状態に書記し、これを巻いて卷子本としたことをいう。
- スリランカでは、本来、占星術師により、誕生日にその人の生涯を予知するホロスコープが作成された。以後、人生の節目や生活上の重要儀礼に際しては、その巻物に記された内容、手順、吉兆の方位・日時等に従うこととなる。
- なお、Albertine Gaur氏の著書(注5文献)のカラー口絵Ⅲは、貝葉を模した彩色紙本(大英図書館蔵、Or.13700.f.61)であるが、内容は、北インドの、グジャラート(Gujarat)伝来のカルパストラ(Kalpastutra)の一部(1502年または1445年)、予言者と占星術師が、トリシャラ王妃の14の夢の意味を決定しようと巻物を調べて書き留めている、図であるとされる。その占星術師の右手には、ロール状の貝葉本が、左手には筆具が握られている。
- 24) 原文にhandlesとみえるが、尖筆の頭部、ファン部などにおける彫刻のことか。
- 25) hasthiは象の意の古語、sinhaはライオンの意の古語、hansaは白鳥の意の古語。なお、ここでは、尖筆にこうした三種があるとするが、次節では、写字者三派の問題としてみえている。
- 26) 次節のKākuna参照(注51)。
- 27) milletとあれば、アワ、キビを指すようだが、学名Eleusine coracanaとは、イネ科、オヒシバ属(Eleusine)のシコクビエ(稷、竜爪粟)、一名、弘法ビエに相当するものか。ヒエと同じく食料とし、牛馬や鳥の飼料とする(牧野富太郎著『牧野日本植物図鑑』、北隆館、昭15.10、P.853、また、大井次三郎著

『改訂増補新版日本植物誌 顕花篇』、至文堂、昭和53.10、P.156)。臼でひいて粉にし、ケーキのように焼いたりするが、ここは、そうした穀物の粉を用い、葉面をふき磨くものであろう。

- 28) 原文にはdisplaysとあるが、同博物館に陳列品はない。その併設された図書館の閉架式書庫に保管されている。
- 29) 注18参照。
- 30) 原文にはare dried for three days in the sunとあり、dry in the shade(陰干しにする)といった形になっていない。なお、アル・ヴィハーラ寺で、ヤシの葉を陽にさらす折、時々、水に浸していたのは、温度を下げるためでもあったろうか。
- 31) 文意は、日光に3日間さらし、後、夜露に3晩さらす、ということらしい。
- 32) ヤシ科のビンロウジ属(Areca、アレカヤシ属とも)のビンロウジュのこと。通直単幹で高さ10~17m、まれに30mに達し、径10~20cm。樹幹は、若い時は深緑色で、老成したものは灰白色となり、間隔の広い環状紋がある。無刺、円柱形。約60種が、インド、中国南部、東南アジア、ニューギニア、ソロモンに分布する(上原氏の注10文献、P.1159。また、中須賀常雄、他著『沖縄のヤシ図鑑』、ボーダーイング、1992年11月、P.102)。材は、非常に硬くて丈夫である。
- 33) Pitakaは、パーリ語で、籠かご、また、三蔵、聖蔵、の意。
- 34) Jātakaジャータカは、釈迦が前世に行った善行集で、本生経、本生話、本生物語などと訳される。パーリ語、および、シンハラ語で書かれた、南方上座部の経蔵(小部)に含まれるテキストで、22篇547話から成る。経典としてのJātakaは偈文のみのものを指すが、それに義釈の部を含めたものも行われ、これをJātakatthakathā本生経註釈という。和訳は、『南伝大蔵経』、第28~39巻に収める。
- スリランカでは、Jātakaは、きわめて日常的な「経典」とされ、「ジャータカは説教・法話の材料となり、子供にも読んで聞かせ、寺院の仏殿の壁画に描かれ(注53参照)、演劇・映画にも上演される。また、それはシンハラ文学作品の重要な素材ともなっている。シンハラ語、パーリ語の学習のテキストである。」(橋堂正弘「諺から見た民衆の仏教」、前田恵学編『現代スリランカの上座仏教』<山喜房仏書林、1986年2月>所収、P.417)と述べられている。
- 35) 原文には、Its shape, ……are balancedとある。作業内容に応じて、尖筆を使い分けるのであろう。

- 36) 原文には, the writing lengthとある。
- 37) 現実には, この比率どおりにはなっていない。
- 38) それぞれ, 2 : 1 : 1.5 : 0.5 : 5 の比率となる。
- 39) Piritは, パーリ語でParittaパリッタ, サンスクリット語でParitrāṇaパリトラーナ, タイ語でPaaritパリットという。パーリ語では, 形容詞として「小さき, 少なき」の意, 名詞(中性, 女性)として「(小さき)護呪, 護経, 呪文」の意をもつ。
- スリランカでは, 民間の仏教儀礼の一つとして, “災厄を防ぐため, あらゆる栄華の成就のため, あらゆる苦しみ・恐怖・病気を滅するため, 吉祥なるパリッタを唱えよ”と, この護呪經典を誦唱する。こうした護呪経を集成したPirit Potaピリット書として, 今日, 流布しているものに, Catubhānavāra四誦分があり, この中でも, Mahāmaṅgala-sutta吉祥経, Ratana-sutta宝経, Karaṇiyametta-Sutta慈経の三経(ピリット, 四誦分), および, Jayamaṅgala-gāthā勝利吉祥偈, Mahājayaṅgala-gāthā大勝利吉祥偈の副ピリットは, Maha Piritと称され, 最も重要なものとされる(片山一良「パリッタ(Paritta)儀礼—スリランカの事例—」, (駒沢大学)『宗教学論集』, 第9輯, 1978・79合併号, 1979年12月。青木保「コロomboのparitta儀礼—調査覚書—」, (大阪大学)『年報人間科学』, 第1号, 1980年。高橋壮「上座仏教の存在形態(五)—ピリット儀礼—」, 『現代スリランカの上座仏教』(注34参照), 第五章, P.207~261)。
- 40) 原文には, three schooles of writersとある。注25参照。
- 41) サンスクリット語である。
- 42) anusvarは, ◌の名称。母音の子音化を示すhalkirimaの一種で, 発音は, -n, -m。次行の例示は, kām, gām。
- 43) visarga (bindu-deka, visargayaとも)は, ◌の名称。母音に附属する気音文字で, 発音は, -h, -ḥ。次行の例示は, kah, gah, またはkah, gah。
- 44) dvaは, サンスクリット語で, secondの意。シンハラ文字は, このような形に見えるが, [マ]^{注7}(dva), あるいは, [ミ]^{注8}(dvi)とあれば, わかりやすい。
- 45) サンスクリット語, thirdの意。
- 46) [ム]^{注9}(lita)は, 曆, カレンダー。[メ]^{注10}(lakuna)は, 小さな目じるし, 本を読みさしにする場合など, そのページの欄外上部に付けるマークやスモールポイント, また, しるし, 記号, 符号, 兆候, 痕跡等の意。
- 47) daru, また, daruvāは, 子, 子供, peḷaは, 一列に並んだもの, 列などをいう。英語訳は, child lineとある。オリジナルな本文に対する, 後筆や別筆による, 訂正のための書込み(文字の行列)をいう。
- 48) 原文には, are bracketed in double bracketsとある。シンハラ語のVarahanは, 各種の括弧(印)を汎称したもの(名詞)とみられるので, そのdoubleは, 括弧の首(開)と尾(閉)の二点をいうものと解した。
- 49) シンハラ文字のdummalaは, 樹脂, やに, 等の意。
- 50) アオイ科(Malvaceae)のワタ属(Gossypium)に属する, ベニバナワタ(落葉半灌木), インドワタ(落葉灌木, 時に草本), などを指す。パンヤ科(Bombacaceae)のキワタ属(Bombax)やインドワタノキ属(Ceiba)は別(上原氏『樹木大図説II』, P.1161~1171)。
- 51) *Canarium*は, カンラン科(Burseraceae)のカンラン属のこと。熱帯アジアに約50種ありといい, 喬木で, 多く, 常緑。果実は酸味あり, これから採った油はランプに用いる。枝節や樹皮からも樹脂を採り, 膠漆のような用途に用いる。(上原氏, 注50文献, P.712~715)
- 52) *Feronia elephantum* Correaは, ミカン科(Rutaceae)のゲッキツ属(Chalcas)のそれで, 常緑灌木(15m)。果実(径8cm)は酸味多く, 食用とする。スリランカでは, 象の大好物といい, その糞にはその厚殻がそのまま出てくる。英名Wood Apple, Elephant Appleといい, 学名は, ローマの森の神の名。(上原氏, 注50文献, P.701)
- 53) 『南伝大蔵経』, 第39巻(小部經典17, 本生経12)に, 「毘輪安咄囉王子本生物語」(高田修訳)としてみえる人物である。Vessantara王子は, 布施を好んで常に大施を行い, ついには, 妻や子供までも差し出してしまったという。感動的な人物として描かれており, ために, このジャータカは特に人気がある。
- 54) 原文は, Charms (mantra)とある。mantra [モ]^{注11}は, 呪術師の呪文, まじない, また, 魔よけの護符, お守りのこと(単数形はmantraya)。マントラのことばは, シンハラ語, タミル語, 南インド語(ケララ・マラヤム)などの混淆したものとされる。
- 55) yantra [ヤ]^{注12}は, 機械(machine), しくみ, また, そうした図形で構成される護符, 魔よけ札, お守りのこと(単数形はyantraya)。[ユ]^{注13} yantra mantra karanavāで, 呪術(魔術)を行う(呪う),

の意となる。

- 56) *Diospiros Ebenum* Koenig は、カキノキ科 (Ebenaceae) のコクタンをいう。常緑喬木、雌雄異株、高さ6~10m。心材は真黒色、黒檀と称する類の一種。インド、マラヤ、タイ、ミャンマー、スリランカの産。(上原氏、注10文献、P.645)
- 57) *Pterocarpus Marsupium* Roxb. は、マメ科 (Leguminosae) のシタン属 (*Pterocarpus*) のキノをいう。テチガイチーク。落葉喬木、高さ10m、インド中南部産、材はチークより重く、赤褐色、光沢強く有用材。樹液を薬用、および、染料とし、Kinoという。(上原氏、注50文献、P.548)
- 58) *Mesua ferrea* L. は、オドギリソウ科 (Guttiferae) のテツザイノキ属 (*Mesua*) のタガヤサンをいう。テツザイノキ、セイロンテツボクなどとも称す。常緑喬木、高さ12m。インドでは神聖木として崇め、パゴダや仏寺境内に植える。花に芳香あり。材は堅く美しく、心材は暗紅色、唐木中随一という。土木建築材や枕木に用いる。インド、マラヤ、スリランカの産、地元では、庭樹、並木とする。(上原氏、注10文献、P.110)
- 59) *Michelia* は、モクレン科 (Magnoliaceae) のオガタモノキ属 (スイスの M. Micheli <1844~1902> への献名) のことであるが、*nilagirica* については未勘。この属に属するオガタモノキ、カラタネオガタマ、キンコウボク、ギンコウボクなどは、いずれも常緑喬木 (高いものでは16mにもなる) で、花は芳香を放ち、香水の原料となるものもある。キンコウボク (金厚木) の類は、インドの寺院境内に多く植え、宗教儀式に用いる。(上原氏『樹木大図説 I』、P.1086~1092)
- 60) 未調査。Sarath Hapugoda氏によれば、これら堅材の内では最も堅い木であるとされる。
- 61) *Artocarpus integrifolia* Roxb. とは、クワ科 (Moraceae) のパンノキ属 (*Artocarpus*) のナガミパンノキ (*Artocarpus integrifolius* Auth.) の仲間か。英名Jackという (そのJakとはこれによるらしい) のも同じである。これは、常緑喬木、雌雄異株で、高さ10~15~30m、世界最大果実の一つとされ、材は伐採後に黒変してマホガニー材に似る (S. Hapugoda氏によれば、材の堅いことでは、Millaの次くらいかとのことである)。スリランカでは工芸用材とし、内皮より黄色の染料を採り、僧衣 (麻) を染める。(上原氏、注59文献、P.904,906)
- 62) *Sansevieria zeylanica* Willd. は、リュウゼツラン科のサンセヴィエリア属 (*Sansevieria*) のそれ

ある。スリランカ原産で、英名Ceylon bowstring hempという。葉は、長さ60cmあまりで、長い多くのfiberを有する。繊維作物として植えられ、ヒロハチトラセン、オオヒロハチトラセンなどととも、弓絃、ロープ、マット、帆、ハンモック等に利用される。(相賀氏『園芸植物大事典2』、注10参照、P.498)

63) この三度目の巻き方につき、原文にはthree and three towards the right and two pairs across とある。その3回、3回は、斜めに巻いて互いにクロスさせる、との意味であろうか。存疑。この目録は、巻頭に貝葉本一点の図版を掲げるが、そこに見える巻き方は、これと少異し、また、アル・ヴィハーラ寺やキャンディの仏歯寺で見られた巻き方と異なる。

64) Pansalaは、仏教系の寺院をいうが、ここは、そうした村落寺院に併設されている日曜学校 Daham Pāsala (法の学校) を意味するのであろうか。

今日の日曜学校につき、キャンディ近郊のウーラポラ村落 Ūrāpola のその事例報告がなされている (戸谷修「スリランカ仏教を支える村落社会」、『現代スリランカの上座仏教』(注34参照)、P.304~308)。

65) 大石碩「シンハラ村落社会の生活慣習と村人の上座仏教——事例研究——」(『現代スリランカの上座仏教』(注34参照)、P.326~332) によれば、スリランカでは、子供が初めてアルファベットの読み書きを学ぶ時、akurukiyavimē utsavaya という成育儀礼が催され、この記念祭は、Ūrāpola村では、なお、存続しているとされる。即ち、この儀礼は、子供が文字を習い始める頃になると、その子のホロスコープに従い (注23参照)、寺の境内の菩提樹の前で、僧によって執行される。この時、Sarasvatī女神 (学問の神) の姿を写しとった石膏板、供物、香花を用意し、吉兆の時刻に子供を吉兆の方角に向かわせ、僧がアルファベットの数字文字を読み始め、それをまねて、子供は、順次、発音していく、とのことである。

66) 教具としてのsand boardにつき、辞書には、

'1817 A. Bell Instr. Conduet. Schools [ed.6]
8 The scholars copy.. the capital printed letters on sand at the 'sand board.'
The Oxford English Dictionary (Second Edition) on Compact Disc. 1992, Oxford: Oxford University Press.
とみえる (井上永幸氏御教示)。

67) このits descriptionとは、その文字の意味、および、その文字の書き方、形体、その他をいうものであろうか。下に、a [ヨ] の字の書き方についての説

- 明がなされているが、生徒は、まず、このような文字の名前、筆順や運筆方法、また、これらに附随する留意事項などについての説明を受け、これをみずから反芻しながら、その練習、習得を行っていくのであろう。
- 68) その先端は、鋭ってはいるが、シャープではなく、鈍く丸くなっている尖筆。[ラ] ラ ulは、先の短い、鈍い、意。[リ] リ katuvaは、thorn、(植物の)とげ、(魚などの)骨、(時計の)針、(亀などの)甲羅、(貝や卵などの)殻、等の意。
- 69) 原文には、cutting of figuresと注記されている。文字それぞれの特徴を概略的に習得するため、文字の下書のcutting (裁ち切り)をいうものらしい。Saṭahan [ル] ル は、下図、下絵、見取図、略図、設計図、製図、メモ(帳)、控え、覚え書き、ノート、現場手帳、notes、また、概略out line、概要、の意。kapanavā [レ] レ (現在形)、kāpima [ロ] ロ (動名詞)、[ワ] ワ kāpivā (過去形)は、切る、削る、刈る、(紙や衣服などを)裁つ、裁断する、等の意。kāpumaは古形か。
- 70) [中] 中 potgulaは、書庫、教典堂、図書館 libraryの意。類義の語に、pustakālaya、pustakāgārayaなどがある。
- 71) 関連して、戸谷氏(注64文献、P.282)に、nākatkaru、また、porondam bālīmaについての言及がある。占星術師は、かつて、パルミラヤシの葉で、新年の行事予定表(avurudu siṭṭuva)などを作製し、各家庭に配って歩いたり、各種儀礼を取り行う折には、nākāt potaという、専用の作法・次第書を作成、使用したりした(大石氏、注65文献、P.334、P.349、他)。
- 72) 司祭者の謂か。多くの寺院には神祠dēvālayaがあり、通例、ここにはkapurālaと呼ばれる専従の祈禱師がいる。これは、時に、kapuvāともいい、丁寧には、kapu mahatmayaという(前田恵学「上座仏教の存在形態(三)——寺院と僧侶——」、『現代スリランカの上座仏教』(注34参照)、P.115、P.121)。
- 73) 専門の祈禱師、呪術者。kattañḍiyā (yakāduru)ともいい、敬意を表す場合はkattañḍi-mahatmayaという。kapurāla (kapuvā)はyātikāを読み、こちらはmantraを唱える(前田恵学氏論文、注72参照、P.136)。
- 74) このあたりについては、その17ページ40行目前後にも類似の表現がみえている。
- 75) 原文には、at the timeとある。
- 76) インド南部のタミル族、チョーラ朝のエラーラ王の進攻による国都陥落(B.C.259)、また、その前後の対立抗争、以下、7世紀のNarasimhavarman一世(625~645年頃)の侵寇、11世紀初頭、Mahinda五世(982~1029年)時代のCola人の大侵入、などをいうものか。
- 77) Vijayabāhu一世(1055~1110年)の時、衰亡していた仏教を復活せしめるため、ビルマ王Anuruddha (Anawrahta、1044~1077年)に使を送り、ビルマ国から仏教を逆輸入したこと、13世紀頃、ビルマ国から多くの留学僧を迎えたこと、また、Parakkamabāhu六世(1412~1467年)治世下の1425年、ビルマ・タイ・カンボジャの比丘が来島し、経典を学び、カラニヤKālanīyaで受具した(前田恵学「スリランカ上座仏教の歩みと近代化への対応」、『現代スリランカの上座仏教』(注34参照)、P.462)こと、などを指すか。
- 78) ポルトガル(1505~1658年)、オランダ(1658~1796年)、イギリス(1796~1948年)、などの来島、支配をいうものであろう。
- 79) このあたりの概況については、前田恵学「西洋支配下のスリランカと仏教の復興」(『現代スリランカの上座仏教』(注34参照)、P.468~492)に言及がある。
- 80) 仏陀入滅の年に、インドからスリランカに渡来した最初のシンハラ王という。仏陀入滅の年代については諸説があり、B.C.544年から383年まで、150年余のずれがある。Vijaya王子の故地についても、西北インド説、および、東インド説、がある。
- 81) Magadhaは、ガンジス川中流の南岸地域で、今日のビハール川南部に当たる。
- 82) ベンガル(Bengal)地方(ガンジス川とブラフマプトラ川両水系の下流平野と河口部一帯。インド共和国の西ベンガル州とバングラディシュ共和国から成る)は、ベータ時代にはバンガーVangāと呼ばれ、現地名は、それに由来するとされる。
- 83) Kalingaは、インド半島北東部、オリッサ海岸地方の古称。中心はブバネーシュワルの東郊シシュパルガルフ(Sisupalgarh)とみられ、B.C.3~A.D.4までの遺跡がある。
- 84) Prākritisは、中期インド・アーリア語の俗称で、「インド・ヨーロッパ語族のインド語派の古層に属するヴェーダ語および古典サンスクリットと、同語派の近代諸語との中間にある諸言語の総称。」とされる(千野栄一、他編『言語学大辞典 第3巻 世界言語編』、三省堂、1992年1月、P.756)。南方上座部仏教の教典に用いられたパーリ語は、古層のプラークリットの、ジャイナ教の聖典に用いられた半マガダ語は、

中層のそのの、それぞれ代表的な言語である。

- 85) 1594年は、ポルトガル人によって承認された年代であるが、彼らがやって来た1505年頃、スリランカは、北のジャフナ王国、西のコーッテ王国、そして、コーッテから分かれた中央部のキャンディ（ウダ・ラタ）王国（1474～1815年）の三者が鼎立していた。
- 86) 当館の所蔵はこれだけで、収蔵庫、蔵などに収納されているものはないとのことであった。
- 87) 但し、素材がもろいとしても、その耐久力に応じて、やはり、転写が繰り返されてきたのではなからうか。
- 88) これらは、独自に生れてひとり行われていたものか、あるいは、他国から影響を受けて出現したものか、逆に、他国に影響を及ぼすことはなかったか、こうした点については、まだ、言及できない。
- 89) 無理にお願いして、文学の小作品集を拝見し、「奥書」やページの打ち方（一葉の表側の左隅）、収蔵されている貝葉本の概要などについてお話を伺った。
- 90) アジア文化研究所（Institute of Asian Studies, 所長彦坂周氏）では、“A Descriptive Catalogue of Palm-Leaf Manuscripts in Tamil”, Vol. I, Part. I (1990年, Madras, India, P.447, 18.5 cm×25.5cm), 以下、インド内外の図書館、寺院、個人所蔵のタミル貝葉文献の総目録が刊行されつつあり（全12巻25分冊の予定、今、Vol.Ⅲ, Part I・Ⅱまで刊行）、また、タミル貝葉を中心とする研究書、校訂書、対訳書、その他が出版されている。

彦坂氏の御教示によれば、タミル貝葉は、Government Oriental Manuscripts Library (Madras) に15,000点、Tamil University, Tañcāvūrに5,000点、など、インド国内外で計約53,020点が遺存するとされる（試算）。

[附記] 本稿をなすに際し、島根県立島根女子短期大学の瀬古康雄先生、本学部の守山善美先生、井上永幸先生の御指導をいただいた。記して御礼申し上げたい。

[追記1] 成稿後、Robert Knox著、濱屋悦次訳『セイロン島誌』（1994年6月、平凡社）を入手した。17世紀後半の文献で、書物の作り方、その素材（タリポットヤシ、パルミラヤシ等）についての言及もある。

[追記2] 後者（学名 *Corypha talliera*）につき、その開花時を描いた図版が、荒俣宏著『花の王国4 珍奇植物』（1990年11月、平凡社、P62）に掲載されている。

○文中[ア]～[キ]の部分には次のような文字や語句が位置する。印刷の都合上、ここに一括して掲げる。

- 注ア ත්‍රේ ගඬ
- 注イ ත්‍රේ කෙළිය
- 注ウ ප්‍රභේ කෙළි වෙත
- 注エ ප්‍රභේතනය
- 注オ ග්‍රන්ථය
- 注カ ප්‍රන්ථිලි
- 注キ ලිපි
- 注ク සිංහ
- 注ケ ලකුණ
- 注コ සිව් සිව්
- 注サ ත
- 注シ තු
- 注ス තුමි
- 注セ ගමි
- 注ソ ත්‍ය
- 注タ ග්‍ය
- 注チ තුතති
- 注ツ ත
- 注テ ව
- 注ト තු
- 注ナ ග, ල
- 注ニ ග, නි
- 注ヌ ලිමිමිලි
- 注ネ කු, කුතු
- 注ノ ලිවිලි
- 注ハ වුරකතන්ලි
- 注ヒ අ
- 注フ ලිලිකවුව
- 注ヘ සිව්පත් කුප්‍රම
- 注ホ ප්‍ර.පිලි
- 注マ ලිව
- 注ミ ලිම
- 注ム ලිත
- 注メ ලිකුණ
- 注モ මන්තු
- 注ヤ යන්තු
- 注ユ යන්තු මන්තු කරනව
- 注ヨ අ
- 注ラ ලිලි
- 注リ තවුව
- 注ル සිව්පත්
- 注レ කුප්‍රම
- 注ロ කුප්‍රම
- 注ワ කුප්‍රම
- 注キ ලිපිත්තලි